

たんです。

慰安婦問題は、韓国側の政権交代や徴用工問題も相俟って複雑になっていくけど、韓国の新政権誕生で、新たな日韓関係の改善、解決を望むところです。

《河野総裁誕生》

○紅谷 平成五年の常会で、自民党内の分裂により宮沢内閣不信任決議案が可決され、衆議院は解散、総選挙になります。

六月十八日に解散し、選挙は七月十八日ですが、その間にG7東京サミットが開催されました。自民党は分裂の上に、サミットが開催される中での選挙でしたが、どういう選挙戦だったのでしょうか。

○河野 宮沢総理は、東京サミットの準備もあつたけど、それよりも嘘つきだ何だとさんざん言われて信頼度が下がってしまったって、選挙応援ができないんです。特にほぼ同時にあつた都議選の応援要請はほとんどないんです。それで、僕と森山眞弓文部大臣に応援要請が偏つたんです。

選挙の出陣式は、野党は数寄屋橋や新宿でやっているのに、自民党は党本部の前で形だけやって終わりでした。僕は官房長官としてサミットの記者会見もやらなきゃいけない、選挙の応援要請もあるというのでとても大変でした。

サミットは迎賓館でやって、そこから選挙応援で八王子など都内を回って、戻ってきて記者会見というようなことを繰り返していました。僕らが本格的に選挙に集中できるのは、サミットの宮中晩さん会が終わって各国首脳を見送ってからです。

総理は応援に行くことはできないので、そうなるかと頼りは後藤田副総理だと僕は思っていたんです。サミットが終わって、後藤田さんと二人で外国の皆さんをお見送りし、後藤田さんから、明日か

らしつかりやろうと言われて別れたんです。それでホテルへ帰ってシャワーを浴びていると電話がかかってきて、後藤田さんが倒れて日赤病院に入ったというので、これは大変だと思ってタクシーに乗って病院まで飛んでいったんです。

後藤田さんは心臓が悪くて倒れたんです。行った時は落ち着いていたけど、医者からは余りしゃべったりしてはいけないと言われて病室へ入ったら、河野さん、お渡しするものがあると言うんです。

渡されたのは辞表で、総理の補佐もできずに申し訳ないと書かれていた。これは受け取るわけにはいかなのでお返ししますと言ったら、いや、持っていけど、多少の押し問答をしていたら医者が飛んできて、心臓が悪くて寝ている人と押し問答なんかしちや駄目だと怒られ、一応受け取って帰ってきました。結局、宮沢総理には渡しませんでした。

選挙は一生懸命やっただんですが、その選挙が勝ったか負けたかというの、なかなか微妙でした。

○紅谷 選挙前に、自民党三役で票読みをされたと思いますが、どういう読みだったのでしょうか。

○河野 それがよく分からなかったんです。というのは、経世会が分裂して閣僚を含めて何人ぐらい出ていくのかが分からなかったんです。

それからもう一つは、不信任案には反対票を投じたけれど、武村さんたちのさきがけが離党して、その時点で過半数を割ったのだから選挙は大変なのに、党内は幹事長が全然司令塔の役にならなくて選挙らしい選挙ができないんですよ。

あの時は五十人ぐらいが離党して、選挙では、自民党議員の数と選挙後の当選者の数では一人増えたんです。だから、議員数としては一人増えたけれども、過半数割れをしまいました。

○紅谷 選挙結果は、追加公認を入れて二百二十八人になりました

が、選挙前が二百二十七人、離党者を除いた数ですので、一人増えたのでしようが、それをどう評価するのかわかりません。

○河野 僕は、選挙としては一人でも増えたんだから負けではなかったと思うけど、選挙前の政権を担当していたときの勢力から見れば、過半数を割ったわけです。負けとなれば、総理・総裁は責任を取って辞めるということでしょうが、宮沢さんと僕の二人だけの話では、宮沢さんは非常に意欲があつて、なぜ意欲があつたかという、自民党は二百二十八だけれども第一党で、第二党の社会党は七十人余りしかないから、第二党の三倍あるわけです。過半数はないけれど圧倒的に多いから、責任もあるしやらなきゃいけない、宮沢さんはそう言ったんです。

僕は、それは当然そうだけど、その場合にはどこかと連立を組まなきゃいけない。それは、細川さんは宮沢さんと懇意だったし、武村さんも宮沢さんとの関係は悪いわけじゃないから、そういう連立を組むことを考えなきゃいけないのだけれど、党の責任者、自民党のトップがいらないんです。

宮沢さんは、僕にはそうささやいて決意を披瀝していたけれど、一方で梶山幹事長は、大敗北で幹事長を辞めると記者会見で言うんです。そうすると、総務会長も政調会長も幹事長が辞めるんだから我々も辞めると言つて、三役が辞めることになった。僕は、三役は辞めても仕方がないから新三役を誰か探そうと思つたら、梶山さんが、我々が辞めると言うことは総裁も辞めるのは当然だと言っちゃうわけです。そうなると、もう流れができて総裁が頑張ると言うわけにはいなくなつてしまつたんです。

本来なら、幹事長は、責任は選挙を指揮した私にあるから我々は辞める、後は新しい人が総裁を支えてやってくれとか言つてくれれば、少数与党でも連立を組めば政権は継続できたかもしれないけど、そこでもう完全に総裁辞任の流れができて、それを聞いた宮沢さん

は、やはり辞めましようといつて辞任表明するんです。

後藤田さんが倒れていなければ、選挙でも相当な役割を果たさされたらうし、それができなくても元気でおられれば、宮沢さんに代わつて連立を組もうと言つて細川さんと話をするとか、武村さんと話をするということはあつたと思うんですよ。しかし、そういうこともできずに、何らなす術もなく野党に下ることになつてしまつたんです。

○紅谷 選挙後は、七党一派の方も必ずしも話が進んでいたわけではありませんが、自民党と連立を組む可能性もあると考えていたわけですね。

○河野 それは、七党一派が、少数党の日本新党の細川さんを引っ張り出して総理候補にしたんだから、そこはやはり小沢さんの目のつけどころはずごいし、腕力もすごいですよ。そんなのはみんなが納得するはずがないと思つていたし、さればといつて社会党が首班候補でまともなとも思えなかつたから、僕はまともないだろうと思つていました。

○紅谷 宮沢総理が敗北を認められて、自民党の中では次の総裁を誰にするかという話になり、後藤田先生の名前が挙がっていたようですが。

○河野 専らそうでした。特にそれを言つたのは三塚政調会長で、河野さん、後は後藤田しかない、後藤田はあなたを一番信用しているから、あなたが口説かなきゃ駄目だと何度も言われました。

僕は、後藤田さんは体調が悪くてとてもそんな状態ではないから、そんな話にはならないと言つても、それでも行ってくれというので行きまじつたけど、奥さんから玄関で、とてもそんな話を聞けるような状態じゃないといつて断られました。

それで、総裁選は渡辺美智雄さんと橋本龍太郎さんの一騎打ちになろうとしていて、まあ、いいんじゃないかと僕は思つていたんで

す。

僕は、官房長官として最後の仕事の慰安婦問題の調査報告のまとめを終え、夜遅くなつて都内のレストランで夕飯を食べていたら、粕谷さんと麻生さん、堀内さんが入ってきて、こんなところで飯を食べている場合じゃない、あなたが総裁選に出ると言うんですよ。

昨日までは、官房長官の出処進退は総理と一緒にと言っていたのに、何で出ると言うんだと言ったら、渡辺と橋本では自民党は沈没するから、ここはあなたが出る以外にないと、それが総裁選の告示前日の夜の十二時ですからね。

それで、橋本君に電話をして、悪いけど俺が出ることになったと言ったら、あきれて物が言えないと言っていたけど、結局降りて推薦人になつてくれたんです。

橋本君は同じ歳だったけど、僕より一期上でした。彼は経世会の人とは余り付き合わなくて、僕なんかと一杯飲もうかとか言っていたことがあつて、割と親しかったんです。

総裁選は、渡辺さんと僕の選挙になつて、僕が勝つたけど、投票中も勝つか負けるか全く分からない状況でした。

○紅谷 結果は二百八対百五十九の大差での勝利となりましたが、勝因は何だったのでしょうか。

○河野 よく分からなかったんですね。

あのときは、地方票が三票だったかな、地方は各県連に一票だから二票だけ割り振って、各県連の幹事長が来ていたんです。県連によつては、勝つた方に入れるという事で予備選をやつたりするし、そうでないところは白紙で幹事長が任されて出てきたところもあるから、誰に入れるかよく分からなかったんですね。

渡辺さんは、宮沢内閣で外務大臣でしたが、体調が悪くて途中で辞めるんです。渡辺さんにとってはそういう体調不安はすごくマイナス材料でしたね。七十歳くらいだったけど、病気を治して総裁選

に出てきたんだからすごい気力だよ。渡辺さんは、負けた後、相手が橋本だと思つていたら違うのが出てきたので、自分の戦略を間違えたと言つていましたね。

○紅谷 自民党の総裁選は七月三十日でしたが、七党一派は、前日の二十九日に政権樹立構想を合意していました。そういう中での河野総裁誕生となりました。

○河野 みんな戦意喪失していたよね。それから人事だけど、これが一番嫌な仕事でしたね。

河野が当選したのは派閥選挙をやらなかったからだみたいな話が前段にあつたものだから、これで派閥人事をやつたら駄目だと言われたけど、実際はそうもいらないんだよ。

橋本さんは、当然自分が幹事長だと言つているというので、若干借り気分があるし能力はある人だから、どうするかと思つていたら、松野頼三さんが現れて、自民党は野党になつて連立側と戦わなきゃいかぬ。何で戦うかといえれば政策で戦う以外に道はないから、今回の人事は、幹事長ではなく政調会長が一番重要な人事だと言ってます。

そう言われると橋本さんが適任だと思つて、橋本さんに政調会長をやつてくれと言つたら、何で政調会長なんだと、ぶつぶつ言っていた。龍ちゃん、俺は三田だ、慶応の俺が何で稲門の手伝いをして、龍ちゃん、俺は三田だ、慶応の俺が何で稲門の手伝いをして、龍ちゃん、あなたの面倒を見るのかと言つていた。龍ちゃん、そのうち俺があなたの面倒を見ることがあるから頼むよと言つて、橋本政調会長が決まつたんです。だから、幹事長より先に政調会長が決まっていたんですよ。

ところが、幹事長がいらないんです。僕は、幹事長は塩川正十郎さんにやつてもらおうと思つていたら、こんな状況では嫌だと言つて受けなかつたんです。ほとほと困つていたら、森君が電話をかけて

きて、何か手伝うことはないかと言われて、じゃ、幹事長をやってくれるかと言ったら、喜んでやると言うんですよ。喜んでやるけれども、うちには三塚がいるから、あなたが三塚の了解を取らないと受けられないと言うんだ。

そこで、福田赳夫さんに清和会から幹事長を取りますからと頼んだけど、調整は君の仕事だと言われたので、しようがないから三塚さんと話をしましたよ。悪いけれども、自民党の危機的状况の中で、派閥の長が党役員になるのは駄目だから、今回は勘弁してくれと言ったら、これも怒ったね。俺は、総裁選の最中に粕谷と相沢が来て、人事は言うとおりのから河野の応援を頼むと言ってきたから、派閥をまとめて応援したんじゃないか、それなのに話が違うじゃないかと言われた。

相当粘って話をしたら、最後に、森でやったらいいじゃないかと言った。全然納得していなかったけど、やっと森幹事長が決まった。あとは総務会長です。誰にするかというのでみんなと相談したら、これは渡辺派から取らないと、徹底的に渡辺派を敵に回して党運営ができなくなると言われ、これもまた、渡辺さんのところへ頭を下げに行きました。最初は随分どぎつく、考えが違うから協力できないとかさんざん言われたけれど、最後は木部君が君のことを一番よく分かっているはずだからと言ってくれたんです。若干押しつけられたかもしれないという気はしたんですがね。

○紅谷 木部佳昭さんは、先生と当選初期にサイパンに一緒に行かれた、一郎先生の秘書でしたよね。

○河野 そうです。木部さんという人は、父の最後の秘書で一番実直でした。私の父は秘書は全部議員にしていたんですよ。砂田重民、宇野宗佑、蔵内修治、みんなそうです。

木部さんは、その人達よりもずっと秘書歴は長く、父が追放解除になつてからの最初の秘書です。ところが、木部さんは石橋湛山さ

んと同じ選挙区で、石橋さんは鳩山派と一緒にやっていたから、父は、木部を出したら石橋は落ちるだろうからと出さなかったんです。ただ、最後の選挙の時に、石橋さんが総理大臣になったから、木部に次の選挙をやつたらいいと言って出たんです。そうしたら案の定、木部さんが当選して石橋さんは落ちたんです。木部さんはそういう人でした。

こうして、木部さんが総務会長で三役が決まったんです。

○紅谷 三役が決まって、総選挙後の国会に臨みますが、最初の攻防は議長選挙でした。比較第一党から議長という自民党と、選挙をして多数を得た者という連立側との対立でした。

○河野 誰が議長かという、非自民連合が土井たか子さんだと言う。こちら側の主張は、議長は第一党から出すということが慣例で決まっているじゃないかと言うけれど、多数決だからどうにもならない。議長選挙は、負けることが分かっている候補だからなり手がないんですよ。しかし立てないわけにはいかないので、奥野誠亮さんに、負けるけれども、第一党の議長候補だから一番立派な人を出さなきゃならないので、お名前をお借りしたいとお願いしに行ったら、奥野さんは大変名譽なことですと言ってくれたんです。それで、議長候補は奥野誠亮さんになりました。

次に、副議長をどうするか。若手などはこっちは議長と言っているんだから副議長候補を出さないと強硬で、私は、何にもないよりはあった方がいいから副議長を取ろうと言っても勝手にしろと誰もやらない。そこで、土井さんとの関係を考えたら、副議長は鯨岡兵輔さんがいいと思ってお願ひしたんです。案の定、二人の息はびつたりでした。

○紅谷 議長、副議長選出の院の構成が終わり、いよいよ新政権との対決を迎えますが、その最初の場が本会議の代表質問で河野総裁の出番でした。

○河野 細川さんは、世論調査で八割近い支持率だったから、変に悪口を言う世論からたたかれてしまうような状況でした。

だから、最初の代表質問は、細川さんを評価して小沢さんを評価しない、小沢路線は徹底的に批判するけれども、細川さんは評価するという難しい代表質問をやったんです。しかし、自民党からは評判が悪くて、代表質問をすると、連立与党から拍手があつて、自民党は怒って野次るんだから。

それで、やはり国会闘争をちゃんとやらなきゃいけないということで、予算委員会の理事に野中さん、深谷さんという戦闘的な人を並べたんです。とにかく、京都で蜷川知事と戦い、東京で美濃部知事と戦った人を予算委員会の理事にしたんです。だから、この人達は細川総理に対しては厳しかったですよ。

○紅谷 自民党には、まだ離党予備的な人が多くいたので、場合によっては党が再分裂するかもしれない、そういう不安を抱えながらの党運営ではなかったかと思えます。

河野総裁就任後に自民党を離党した議員が二十五人いました。

○河野 そうなんです。特に、河野でまとまるというのは難しく、もともと右寄りの人、党内的には、渡辺さんの方が自民党はまとまっていたかもしれないね。大変でしたよ。森幹事長が、毎日離党届が出てくると言っていましたね。

○紅谷 自民党は、改革派と守旧派と言われる対立が続く中での党運営で、連立与党とも対峙していかなくてはいけないわけですから、非常に大変で心労が重なる時期でしたが、体調はいかがだったのですか。

○河野 すごく悪かったですね。その頃の血液検査の数値はびつくりするような値で、倦怠感がひどかったんです。総裁の頃から相当体調が悪くて、その後、政権復帰して副総理、外務大臣になるんですが、外務大臣を辞めて、ほとんどその足でそのまま手術だったか

ら、その頃は、肝臓はもう末期症状でした。

《政治改革関連法案成立の経緯》

○紅谷 平成五年の総選挙後の七党一会派の連立政権は、社会党から自民党を出た人まで非常に幅広い人たちが構成されていましたが、連立政権の合意事項といっても具体的な項目は余りなく、政治改革を行うということが唯一の具体的な目標という状況でした。

○河野 政治改革を行うというのはみんな賛成だったけれども、どうやって行うのかとなると、全然自身は詰まっていなかったんです。僕もすごく辛くて、最後は本当に雪隠詰めに遭ったようだったけど、細川さんは社会党を抱えていたからもつと辛かったと思いますね。

社会党の村山さんと連立を組んでからいろいろ話をしましたが、社会党は小選挙区制を導入したらそこで終わりになるから、徹底的に嫌だったわけです。実現したら自分達はもう生き延びられないから、命懸けで反対している人がいたと言っています。

○紅谷 そうでありながら、選挙後には、連立側の案にも河野総裁の下での自民党案にも、中選挙区制の案というのは全く出てきません。

○河野 この頃は、スキャンダルに次ぐスキャンダルだから、中選挙区制なんて言うものなら袋だたきに遭う。それからもう一つは、裏にいた民間政治臨調の案が小選挙区制だったから、中選挙区制というのはどこからも出てこないんです。ただ、自民党の守旧派と言われた人達は、中選挙区のままでもいいという主張です。それから、麻生さんなんかの主張は、定数三人の百選挙区と比例代表、これはやや改良型ですよ。

今になってみると、やはり中選挙区制の多様性を考えると、自民党の中でも都市型の人であれば農村型の人もあるし、環境重視型と

経済優先型がいるから、一つの選挙区に二人出ても、どっちかを有権者に選んでもらえばいいんですよ。

○紅谷 選択の多様性という観点からは中選挙区制がそうだと思いますが、今の選挙制度は小選挙区比例代表並立制で、小選挙区と比例代表という異なる制度を一緒にして多様性を求めた妥協だったということでしょうか。

○河野 それは無理なんですね。小選挙区で落ちた人が比例で救われるという仕組みは最も無理ですよ。だから、やるならば小選挙区は小選挙区、比例は比例で、候補者は完全に別でないと本当はダメですよ。

○紅谷 政権交代後の平成五年秋の臨時国会に、細川内閣は小選挙区比例代表並立制の案を提出しました。自民党もその後に出し、同じ制度なのですが、定数や定数配分の違いでしたが、なかなか修正協議が折り合いませんでした。

○河野 選挙改革と言いながら、定数を四百七十一から五百にするのは焼け太りで、議員の数が三十人も増えるのはおかしい。だから、我々自民党執行部は四百七十一だと言っていたけど、腹の中では増えた方がいいと思っている議員がいっぱいて、最後は五百になっちゃうんです。

○紅谷 二つの案の大きな違いは、小選挙区と比例代表の定数配分。自民党は小選挙区三百で比例は少なくないのですが、連立側は社会党の事情があるので、小選挙区二百五十比例二百五十としていましたが、もう少し比例を増やしたかったのが実情だったと思います。

結局、衆議院ではなかなか調整がつかず、衆議院の採決直前に、最初の細川・河野会談が行われました。

○河野 細川さんは割と固くて、僕が何を言っても駄目です。まとまらないなら、明日の本会議で決めますという話だったんです。

会談に行く前に、自民党の政治改革本部長だった後藤田さんから、河野さん、大体まとまるから行ってみてくれと言われていたのに、全然まとまらなかったんですよ。

○紅谷 後藤田先生は、六分四分ぐらいで、衆議院の段階で修正がまとまるんじゃないかと話されていたようですが、決裂でした。

このときも、民間政治臨調から相当圧力がかかっていたと言われていました。

○河野 すごいプレッシャーがかかって、ひどかったんですよ。

財界四団体が自民党に陳情に来るというから、てっきり景気対策だと思っていたら、政治改革をちゃんとやれと言ってきたんです。それで森幹事長はかっとなって、大きなお世話だ、政治改革は政治家がやるから、そんなことをあなた方に言われる覚えはない、それよりあなた方は景気対策が大事ではないのかと、そんなことがありましたね。

○紅谷 民間政治臨調は住友の亀井正夫さんが会長で、政治家、学者、連合も入っていました。

○河野 議員は当選一回とか二回とかの割と言うことを聞く人達を集めたんですよ。

本当かどうか分からないけど、民間政治臨調の裏は読売新聞で、小林与三次さんが相当シナリオを書いて、舞台回しをやったと専ら言われていましたね。

○紅谷 小林さんは選挙制度審議会の会長でしたね。

○河野 そうです。小林さんというのは昔から小選挙区論者だったようです。小選挙区制になれば、結局、憲法改正をしやすくすることに繋がるんだと。

そこまで言うのと勘ぐり過ぎだったかも分からないけど、そういうシナリオだというふうには僕らは途中では聞いていたんです。

○紅谷 細川・河野会談は物別れとなり、連立側が修正案を出して

きまりましたが、それは細川・河野会談で合意されるかもしれないという案だったと言われていました。

定数五百は政府案と同じですが、小選挙区を二百七十とし、比例の数は自民党に歩み寄った修正案でした。採決では自民党から十三人の造反が出て、内閣提出の法案が修正されて参議院に送られました。

○河野 小選挙区と比例のバランスを変えてきたんですね。採決では、西岡君の他、民間政治臨調と関わっていたような人たちが賛成に回ったんです。

○紅谷 参議院の審査に入っていくのですが、参議院自民党には執行部に批判的な人たちが多くいました。非常に強硬だったのは山本富雄さん、平井卓志さん、村上正邦さんの三人で、総裁といえども、なかなか口出しすることは難しい存在と言われていました。

また、社会党は連立政権に加わっていないながら、参議院社会党では法案に対して反対の意見が強かったので、参議院で法案がどうなるのか分からないという状況でした。

衆議院では連立側に押し切られました。参議院の審議では否決されるといふ見込みはあったのでしょうか。

○河野 一回目のトップ会談では、今も話があったように、細川さんは非常に固かったんです。僕は、後藤田さんから言われていて、どこかで合意ができるんじゃないかと思っていたけれども、細川さんは自説にこだわって、どこも譲れないと言って妥協できなかったんです。

今にして思うと、やはり社会党がとても難しく、表向きは政治改革だと言っていたけど、小選挙区制にすると激減することははっきりしているの、実際は小選挙区制に反対なんです。それで、小選挙区で減る分は比例で取る以外にないから、比例の数をできるだけ増やさないと社会党は納得しない。連立側で合意するためには、

比例を増やすことが一番の解決策で、恐らく細川さんの気持ちはそれだったと思うんですが、連立を主導していた小沢・市川ラインがこの案で絶対譲る必要はないといって頑張ったものだから、細川さんは非常にかたくなになっていたんです。

僕の記憶では、自民党がこだわったのは議員総数、つまり議席を増やすべきでないと言っていた。政治改革に事寄せて議席を増やすのではなく、むしろ議席は減らす方向に行くべきなのに、比例の数が増えるし、小選挙区もそんなに減らなくて、余り議席を増やすべきでないというのが自民党の主張だったと思うんです。

○紅谷 自民党の主張は、公選法本則の定数四百七十一に戻すということだったと思います。

○河野 そうです。定数を絶対増やさないとというのが基本でした。それは、改革派と称する人たちも守旧派と言われる人たちも、定数を増やさないぐらいしか党内のコンセンサスがなかったんです。

それでトップ会談をやるけれども、細川さんは全く譲らず妥協の余地なしというので、本当に短い時間で終わって帰ってきたら、改革派が合意できなかったことに不満で、何で妥協しなかったんだ、たとえゼロ回答でも妥協すべきだったと言うんです。後藤田さんもおかしいな、どうして駄目だったのかなとぶつぶつ言っていたけれど、とにかく駄目で、参議院に行った。

参議院は、今言われるように、山本さんや村上さんが、こんなじゃ駄目だ、俺たちは参議院の社会党とは話ができているから絶対潰すと言って物すごく怒っていたんです。

そのときの参議院会長の斎藤十朗さんは割と穏健派で、内閣と話をして何とか妥協案を見つけたかと思っていると言うけれど、村上さんたちはとにかく潰すという一点張りでした。

そして、衆議院でも石破さんや西岡さんなど十数人が賛成に回って、党は一枚岩でなくなってしまうのですが、それを参議院の人は

非常に怒って、衆議院はだらしがないから参議院はびしょといくと
言っていたんです。

参議院本会議での採決が、ちょうど自民党の党大会の日になって、
高輪プリンスホテルで党大会をやっているけど、参議院議員は本会
議に行っているんです。

党大会で総裁挨拶といったって、事態がどう進むか分からないか
ら、壇の下で参議院の様子を聞きながらいたけど、結局分からぬま
ま登壇したんです。それで、今参議院がやっているから結果を待つ
んだ、しかし、いずれにしても、最後まで党の主張をするみたいな
話をしたと思いますね。

○紅谷 参議院本会議の採決は、臨時会を延長した一月二十一日で、
結果は十二票差で否決されました。社会党から十七名の造反、自民
党からは五人が賛成でした。

その際、河野総裁は二桁の差は軽くないと発言されたとのことで
すが、この発言が両院協議会の協議に慎重なんじゃないか、という
話がありました。随分昔の話になりますが、如何だったのでしょうか。

○河野 その結果にはちよつと驚きましたよ。絶対に否決するとは
言っていたけど、それでもぎりぎりじゃないか、衆議院では自民党
が崩れたから、本当に否決できるのかなと思っていたんです。だか
ら党大会の最中、森幹事長も横にいて気掛かりだったけれど、十二
票差で否決という連絡で、そんなに勝ったのかとちよつとびっくり
したんです。

政府案が衆議院で可決された後、参議院で否決されれば両院協議
会になる。そこで妥協案を探すという建前でやっていたので、僕が
両院協議会での協議に慎重ということはありません。

否決すると参議院はすごく強気で、参議院で潰したんだからこれ
はもう廃案で、両院協議会なんかやる必要はないと言っていたんで

す。連立側は、衆議院は通っているから、参議院で否決されても憲
法のルールに従って両院協議会をやって、それでも駄目なら衆議院
で再議決をするつもりでいるわけです。ただ、社会党が崩れたから、
ちよつと心配はあったわけです。だから、両院協議会の様子はどう
かというのをとても心配していたんです。

それから、これは裏話になってしまいうけど、衆議院で押し切られ
たのを参議院で潰すわけです。僕は、参議院から、潰してや
ったんだからとすごいプレッシャーをかけられて、両院協議会が終
わった後、参議院自民党に総裁が呼び出されて、自民党は党三役と
いう呼び方で、幹事長、政調会長、総務会長だけでも、それを四
役にして参議院会長を入れるというんです。そのときの参議院会長
は斎藤十朗さんで、この人は割と穏健派だったので、僕はいんじ
やないかと言って、三役を四役に変えたんです。

ところが、その後に村上体制になったんです。僕は辞めた後、だか
らどうだったか知らないけど、大変だったろうな。

○紅谷 衆議院は可決、参議院で否決という結果になりましたので、
憲法の規定に基づいて、衆議院は両院協議会を求める手続に進んで
両院協議会が開かれます。衆議院側の協議委員長は公明党の市川
雄一さんでした。

院の意思を構成した会派ですから、衆議院は連立側の十名、参議
院は自民党だけではなく、共産党と二院クラブも入った十名です。
初会の議長はくじ引きで決めるのですが、両院協議会での思惑があ
って、初会に議長を取る是非は内々に随分議論されました。

私は衆議院側の事務方に入っていましたので、今だから話します
が、両院協議会での合意は考えられませんでした。次の策としてはど
うやって打ち切るか、何が何でも一日目に打ち切るわけにはいきま
せんから、できれば二日目に議長を取る方がいいという話をしてい
ました。

○河野 ああ、そうか、議長は一日で更代するわけだね。

一日目が参議院だと二日目は衆議院になって、議長を取ると一票減って採決では十対九で勝てないから、議長が両院協議会で打ち切るしかないから、参議院側はそうさせないためにどうするかを考えるわけだ。市川さんだから相当強引に打ち切るだろうというのですごく警戒していたんです。

○紅谷 両院協議会是非公開なので、中の様子は外から分かりませんが、強引だったのは参議院の自民党で、協議の段取りに入ろうとしても、村上さんが議事進行だと言って全く進めさせてくれず、これには衆議院側の方は対抗というか喧嘩できる人がいなかったものですから、非常に大変な運営でした。

○河野 僕は、土井議長のところへ押しかけて、両院協議会は終わったと言ってくるかもしれないけれど、もっとやるように言ってくださいとお願ひし、土井さんは絶対反対だったから、わかったと言っていましたよ。

○紅谷 両院協議会では外の状況が全く分かりませんし、土井議長の動きも必ずしも分かっているわけで、外からも、両院協議会の状況をいろいろ聞いて来たりするんですが、話すわけにもいかず困りましたね。

議員も中の様子を外に伝えたくて、メモを書いて外に渡してくれと言う人もいました。ですから、外は中のことを、中は外のことを非常に気にしていたのがよく分かりましたね。

○河野 心配していたんだよね。

だけれども、やはりこうして考えてみると、両院協議会という制度は、あれしかないのだろうけど、あのやり方で修正が合意したというケースはほとんどないわけでしょう。

○紅谷 後世になれば、この政治改革法案が合意した事例ということになっているのでしようが、実際上は考えづらいですね。

衆参の意思の違いを調整する制度ではありますが、そこですぐ結論を得られるくらいならば、衆議院や参議院の審査の段階で話しがあつて修正されるだろうと思います。

○河野 あの場合で修正案ができるとは思えないよね。ただ、やはり両院の意見の違いをどこかで調整して結論を出さなくてはいけないのは分かるけれどもね。

○紅谷 学者等には、両院協議会の改善策として、衆議院は連立与党だけ、参議院は自民党だけではまとまるわけがないから、衆議院からも参議院からもバランスよく言いますけれども、それでは各院での議論と全く同じことになりますから、まとまることはありません。

○河野 やはり党議拘束がきちつとあるから、それが崩れたからそうなったんだけど、つくづく両院協議会という制度をどうしたらいいのかということを考えましたね。

どうすればいいんだろう、もっと公開した方がいいのかな。公開すればなおさら駄目か。

○紅谷 公開すると、それぞれの党の主張に沿った意見しか言わなくなりやすから、対立するばかりですね。

○河野 難しいよね。とにかくそういう難しさが残りましたよ。

○紅谷 両院協議会の中では、実は乱闘寸前の場面もありましたが、市川議長が、成案がまとまらなと宣告して一応終了しました。

一方で、土井議長は細川さんと河野さんと呼んで話合いをしていたということでしたが、どういう話だったのでしょうか。

○河野 土井さんは、衆参で意見が違ったんだから、ここでまとめなくていいんじゃないか、もうこの国会はこれで終わりにして、よく考えて次の国会で議論してはどうか、と言っていた。土井さんの本心です。

○紅谷 両院議長の下に協議機関を作つて協議をしようという話が

あつたようですが、連立政権側からすると、先送りは潰れるに等しいことだったかと思えます。

○河野 絶対先送りしたくないわけですよ。

土井さんは、僕にも細川さんにも当然だけど同じことを言ったんでしよう。だけれども、細川さんは絶対嫌だったんですよ。細川さんは、議長がそこまで言うのは少し言い過ぎじゃないかとしきりに言っていましたね。

その少し前から、最後はトップ会談でやる以外に方法はないと僕は思っていたし、連立側もそう思っていたんでしよう。それで、例の民間政治臨調がトップ会談をやるべきだと言い出して、細川さんの方はそれに乗って、やりましょうということになった。こっちはずっと留保していたけど、僕は、機が熟して最後の最後でなければまともまらない。更に落とさしどころのイメージができないと、トップ会談に臨んでも答えは出てこないだろうと。それから、党の一任を得なきや交渉に臨めないで、最後は、自民党の三役の腹も大体そういうことで固まったので、トップ会談に臨むことにしたんです。

○紅谷 自民党は非常に難しい局面だったと思いますね。両院協議会で成案を得られなかったので、次の段階は、廃案にしなければ衆議院での再議決となるのですが、そうすると、自民党では更なる離反者が出るおそれが懸念されました。

○河野 そうなったら自民党は改革派が黙っていないわけですよ。改革派は賛成することを公言していたから、守旧派は孤立するだけだから、衆議院で再議決をやりたくなかったんです。

○紅谷 ですから自民党としては、参議院で否決され、両院協議会でも成案が得られなかったにも拘わらず、苦しい局面だったわけですよ。

○河野 そういう状況だったから、トップ会談で決める以外に方法はないということで、トップ会談をやるということになったんです。

す。

自民党の中は、三塚政治改革本部長が小選挙区でやろうじやないかという方で、三塚派の中は割れていたけど、僕は賛成せざるを得ないと言いつつ、森幹事長もやる以外にないという感じでした。木部総務会長が渡辺派だからすごく立場が難しく、元々余り口数の多い人じゃなかったけれども、物を全然言わなかったんです。

木部さんは総務会長で、総務会が一任しないと総裁一任にならないわけですよ。総務会はどうなるかみんな不安だったけど、トップ会談に行く以上は、党の意思を決めていかなきゃいけないから、総務会にかけたんですよ。

案の定、物すごい勢いで賛否両論があつて、ひとしきり議論をしたところで、木部さんが実に鮮やかに、これだけの意見を総裁は聞かれたんだから、後は一任する以外にないんじゃないか、一任でと言つて、そこで一任になったんです。それはすごく鮮やかなまとめ方でした。一任になったのはトップ会談の本場に十数分前で、とにかく終わってすぐ行くようでした。

だけれども、一任だったからすごく気は楽だったんです。最初の会談のときも一応一任ではあつたけど、それぞれが自分の方になると言つていて、二回目の一任は、さすがに改革派も守旧派も両方くたびれて、とにかく任せるよという感じの一任になったから、それで行こうというので行つたんです。

○紅谷 トップ会談は院内の常任委員長室で開かれましたが、誰が入っていて、どういう話だったのでしょうか。

○河野 細川、河野に、小沢、森が陪席して四人、後ろに鈴木恒夫さんと成田総理秘書官がいたのかな。だから、六人入っていたと思うんです。

会談が始まったけど、森さんも小沢さんもほとんど発言しないから、僕と細川さんとのやり取りだったけど、細川さんは、何を言っ

ても分かりましたで、結局、今度は丸々自民党案になったんです。僕は途中で、言ったとおり向こうが呑めば合意しないわけにはいかないと思いました。あれれっと思うぐらいに細川さんの方は全部丸呑み。一回目のときには小沢さんが絶対駄目と言ったのを、二回目するときには小沢さんのかんぬきが外れたんでしようかね、もういよと言ってそのままいったんです。

それで、僕にしてみれば一番の問題は企業献金の廃止で、社会党は企業献金の廃止だけは絶対譲らないと言って強かったから、細川さんもその場では、企業献金の廃止は当然だと言う。ただ、それについて自民党は、今は何億と企業献金をもらっていて、来年からいきなり廃止というわけにはいかなないので、激変緩和のための時間が欲しいと提案し、五年後に見直しという条件で企業献金を廃止することで合意できたんです。

細川さんが、土井議長に報告に行こうというので二人で行って、小沢、森は残って、こういうふうにしようというのを更にやっただです。

僕らが合意した案を持っていったら、土井議長はひどくびっくりして不機嫌で、何これと言うけど、合意されたものを駄目と言うわけにはいかなから、怪訝な表情でした。

○紅谷 合意内容は、細川総理が自民党案をほとんど丸呑みにし、小選挙区は定数三百、ブロックも自民党案に近く、最後はあっけなく合意されたような印象でした。

○河野 だから、僕は、つかえるところはほとんどなかったんですよ。

ただ、定数の五百だけは、議員定数を増やすのはいけないと言っていたけど、何でだったかいいということになった。

○紅谷 小選挙区を増やして比例を減らすというのは、社会党や公明党の主張があったので、そうはいかなかったのでしょうか。



○河野 そうでしょうね。それで土井さんは国会の場で何も議論しないのかと言ったけど、もう会期が終わっちゃうわけだからね。

最後のところはちよつとびつくりするような駆け込みですよ。

○紅谷 会期末でしたから、両院協議会を再開させて、合意できた成案を衆参の本会議にかけましたが、会期終了日の一月二十九日でした。

細川総理は、もし合意しなければ、解散を考えていたのではないかとこの話もありました。

○河野 あったかもしれないね。いや、細川さんはそう思っていないけども、小沢さんはきつとそう思っていただろうね。

解散になれば、自民党は完全に二つに割れたでしょうね。とにかく改革派は、どれだけ妥協してもいいからまとめるというわけで、恐らく、あそこで細川さんが突っ張ってトップ会談がまとまらなければ分裂だったでしょうね。

○紅谷 トップ会談での合意事項ですが、定数配分とブロック制に加え、もう一つの大きな柱は企業献金についてでした。

○河野 トップ会談で決めたのは、小選挙区制でいくよ、それから企業献金はやめるよという、この二つが政治改革の車の両輪だと思は思っていたんです。ほかの慶弔電報を打ちやいけないとかいうのは全く技術論ですよ。それで、時間が経過して今考えてみると、小選挙区制は良くも悪くも制度としてできて動いているけれど、企業献金の方は全く動かなかった。だから、今は両輪が片っ方しか回っていないという感じですよ。

○紅谷 政治改革は、元々はリクルート事件を発端とした政治と金の問題についてで、必ずしも選挙制度が主眼ではなかったと思えます。

○河野 そうですね。政治資金にまつわるスキャンダルが元で政治不信になって、それを解消するために政治改革をやると思ったんです。

よ。

中選挙区は同じ党での争いだから金がかかる選挙になるといのが前面に出て、それで小選挙区の方が注目を浴びて小選挙区制についての合意になったけど、報道では、小選挙区になっても広島では現に一億五千万円も選挙資金で送ったりしているというからね。小選挙区になったら金がかからないとは言いがたいんですよ。そこは僕らも反省しなきゃいけない。本当に金がかからないのかどうなのかというのを、もつときちゃんと議論して詰めなきゃいけなかった。

僕は、あのときに、幾ら制度をつくっても集めるのは集めるから、政治家一人が、年間に集めていい額の上限を決めると言っていたんです。一千万とか二千万とかじゃできないと言うなら、極端なことを言えば一億でもいい。一億は多過ぎるから、五千万までなら集めてもいいけれども、それ以上は絶対集めちゃ駄目とした方がはつきりしていいんじゃないと言っていたけど、後藤田さんにそれは絶対駄目だと言われて、僕はその上限案を途中で降りたんです。

集め方を規制するというけど、集め方は絶対潜っちゃうんだよね。○紅谷 この改正では、政党助成の制度を新しく導入して、国民一人コーヒー一杯分二百五十円ということで、総額が当時は三百億円余りでしたが、公費として政党に分配されることになりました。

一方で、企業献金については、すぐにゼロにするわけにいかないで、五年後に廃止しようということで、取りあえずの間は、資金管理団体をつだけ認めましょう、その代わり政党助成については、五年後に見直ししようというのが附則にありました。しかし、政党助成の見直しはされず、片や政党に対する企業献金はそのまま残っているわけですから、それは二重取りじゃないかという意見があります。

○河野 それは、企業献金を廃止するから、一方で公費助成をするというトレードオフの関係なのに、終わってみたら、こっちは取っ

てあつちはそのままという、今は当時の考えとは全然違う状況になつていますよね。

あの頃の細かいことを思い出してみると、政党助成をするにあたり幾らぐらいが適当か、結果、三百億ぐらいということになつたけれど、あの根拠は、国民にコーヒ一杯だけ我慢してもらおうというのが事の起こりで、あの一番初めは、田川誠一さんがやったコーヒ一杯運動なんです。田川さんは個人の政治資金を、支持者にコーヒ一杯我慢して私に下さいという運動をやつて、それが下地にあつて、新自由クラブは一人二百五十円、コーヒ一杯の政治献金と言つていたんです。

それが耳に残つていて出てきたんです。それは、田川さんが言つた後に武村さんも言い、それで何となく国民にコーヒ一杯、三百億と言われたんですよ。だから、あの三百億円というのは、本当は一億国民みんなから取るという話ではなくて、個人献金だったんです。

一方、企業献金の廃止は、個人献金に振り替えるという話はなかなか難しいだろうから、企業献金を止めて公費助成にしようということでした。だから、公費助成が実現したら企業献金は本当は廃止しなきゃ絶対におかしいんですよ。

しかも、激変緩和のため五年後に見直すと法律の附則に書いたのにスルーした。見向きもしないでスルーしてもう二十五年たつたんだからね。

政治改革の議論が起こつたときは、経団連も、傘下の会員に企業献金は慎もうと言つていたのに、最近の経団連は、自民党に献金してくださいと進んで言うようになってきているからね。

この頃は、企業献金が多いから税制を始めとしていろいろな政策がゆがんでいる、庶民から企業の方へ政策のウェイトがかかつて、企業献金が政策のゆがみを引き起こしているから、それを止めると

いうことだつたのに、それが今またああいうふうになつていくというのは、本当におかしいと思いますね。

○紅谷 確かに、政治献金については透明性とか量の問題もありますが、なかなかその議論が進んでいませんし、特に昨今、政治家個人への寄附は禁じていても、政党から政党の支部等への寄附が認められているのは如何かと言われています。

○河野 あれもおかしいよね。あの抜け穴ぐらいはせめて潰さないよね。

新聞社も、政治改革十年とか二十五年とかという特集を組むと選挙区の話しかしないんだよね。僕に言わせれば、両輪なんだから両方の話をして、記事を作つてほしいと思うね。

これも言つておいた方がいいから敢えて言うけれど、政治改革の議論が起きたときに、時の内閣総理大臣宮沢喜一さんは、腐敗防止法を作ろうと。つまり、金の問題なんだから腐敗防止法を作ろうと言つたのを、あの頃はそんな腐敗防止じゃなくて選挙制度だというふうにごどこかで変わってしまったんだね。僕に言わせれば、あれはどうも民間政治臨調で誰かが誘導したとしか思えないんだ。

○紅谷 大きな事件でも起こらない限り、政治資金の問題に手をつけることがないのは残念ですが、ここは原点に立ち戻る必要があるでしょうね。

○河野 そうですね。確かに昔は何億というスキャンダルがあちこちにあつたのが、最近は何百万とか何千万とか、ちよつと一桁小さくなったということはあるかもしれないけれども、それで良くなったかどうかというのはちよつとね。それがまた、見えていくところはそうだけれども、見えないところであるとすれば困りますよね。

《政治改革法案の評価》

○紅谷 お話のような経過を辿って政治改革法案は成立し、小選挙区比例代表並立制での選挙へと移行していきました。河野先生も何度か小選挙区制での選挙を経験されて、感想や振り返って今だから言えることもあるのではないかと思います。

そこでお聞きしたいのは、トップ会談でのお二人ですが、細川さんは必ずしも小選挙区制論者ではなく、自分は穏健な多党制で中選挙区連記制を想定していたけれども、小選挙区制になったという話をしておられましたし、河野先生も必ずしも小選挙区制が良いというわけではなかったと思います。

○河野 そうそう。僕は、最後までどっちがいいとか何がいいとか言わなかったけれど、終わってから本心はというから、本心は小選挙区制ではなく定数三人の百選挙区がいいと言ったんです。それは麻生さんあたりがしきりに言っていて、誰も支持する人がいなかったけど、僕はいいなと思っていた。細川さんも小選挙区制がいいとは思っていなかった。

○紅谷 お二人がいいと思っていなかったのに小選挙区制になったのですね。

○河野 終わってから、まずかったかなという話をしたけれど、細川さんは、まあまあじゃないですかと言っていたね。

彼にしてみれば、ほっとしたわけでしょう。まとめなかったらあそこで内閣は終わっていたでしょうから、何としてもまとめたいというので、べた降りすればまとまるということでした。

○紅谷 細川さんは、次の常会で議員辞職され、その後は口を閉ざされたままで真意を話されていません。

○河野 細川さんはどこでも説明していないんじゃないかな。僕は、あの後に加藤紘一さんがやっていた中選挙区制議員連盟に

呼ばれて、あれは失敗だったから、もう一回みんなで考えてみてくださいという話をしたんです。

○紅谷 そこには私も御一緒したのですが、加藤さんや共産党の榎田さんの呼びかけで、各党が参加していましたね。

○河野 そう、各党全ていましたよ。だけれども、結局あれで終わりだったよね。

○紅谷 今年になって、新聞社の「平成の時代を振り返る」という特集の中で、政治改革の合意の当事者である河野先生と細川先生が約四半世紀経って、細川先生は、自分は中選挙区の連記制が本当は本心だった、河野先生は、定数三で全国百選挙区が良かったんじゃないのかと述べられていました。

それでは何で小選挙区制に決まったのかという経緯と、当時は小選挙区制になれば政治が浄化されるのではないか、もっと変わるのではないかという期待があったということでしたが、実際に選挙をされた経験も踏まえて、お話しただければと思います。

○河野 振り返ってみると、いろいろ問題があったんです。今の話のように、細川さんも私も考えていることと出した結論は全く違っていました。それじゃ、なぜそのとき言わなかったんだと言われるだろうけど、少なくとも私がいた環境は、党の総裁が小選挙区じゃなくて中選挙区でいいんじゃないかなんて、一言でも言ったりそぶりをしたら党は全くバラバラになって、例えば総裁一任ということにはならなくなってしまおうという状況。

だから、あのときは最後まで口をつぐんで、何を考えているか分からぬ、あいつはばかじゃないかと言われるほど何も言わなかったから、最後は総裁一任になって、党首会談に行けたと思うんです。あれが、私が中選挙区制がなくなってちよっとでも言っていたら、改革派と言われる小選挙区推進グループは、党を出ていったかもしれないという状況で、自分が何を考えているかを表に出すことができない

かったことが一つ。

もう一つは、とにかく党が割れるんじゃないかと思っていきました。守旧派と言われる人たちと改革派と言われる人たちは物すごい勢いで激突しているんです。しかも、その激突がどっちかが圧倒的に多ければ問題ないんだろけれども、大体似たような勢力で割れると真つ二つになるんじゃないか、過激なのは改革派の方で、改革に躊躇するならすぐ出ていくみたいな話だったんですよ。この話の裏には他党からの働きかけがあつて、かなりあからさまに自民党を割つてしまえと考えていた節があつた。だから、党の執行部は党を割らない、割っちゃいけないということが頭の大半を占めていて、小選挙区が良いか中選挙区が良いかということは口に出せないし、どっちが良いという研究すら余りできないという状況だった。あの頃の私のメモを見ても、小選挙区になれば何がプラスかマイナスかというメモはあるけど、そんなに深く書き込んでいないんですよ。

ですから、通り一遍で小選挙区にすれば金がかからなくなるとか、党の意思決定がはつきりとできる、それは選挙にあたって中選挙区だと賛成の人も反対の人も公認されているから、党はどっちなんだという問題がある。一方で自民党という党はいろいろな意見があつた方がいんだという守旧派の主張もあつたりして、どうすればいいかということまで深く考えていないんです。

それから、本当に中選挙区は金がかかつて小選挙区では金がかからないのかと言われても、評論家や学者はそう言うけれども根拠がなくて分からない。今にして思えば、本当はそんなところはもつと整理しておかなきゃいけなかったのが、党を割らないために、まああというのが精一杯だったんです。

細川さんについては全く推測でしかないけど、私よりもつと辛い立場で、何しろ日本新党という政党は四十議席ぐらいしかないのに、首班指名で推されたわけだから、抛り所がないんです。小沢さんは、

小選挙区でどうしてもいくんだと言っているから、背中にピストルを突きつけられて、違うことを言ったらドーンと撃つぞと言われて、一方、最大政党の社会党は、小選挙区に反対だというから、これは本当に辛かったと思うんです。

だから、細川さんにしてみれば全く形勢が悪くなって、自民党案を丸呑みでもいいからまとめるというのが、保身とは言わないけれども、ダメージが少なかつたんじゃないかと思うんですよ。

○紅谷 確かに、最後の合意は、前年十一月のトップ会談で蹴った内容でしたから、細川さんが完全に丸呑みしたと思われるものでした。

○河野 一回目の党首会談のときには全然受け付けなかつた案を、二回目は、ほとんどそれで結構ですとなつたんです。だから、細川さんは、どんな案であれまとめなきゃいかぬという立場にいたと思ふんです。それは、僕もややそれに近い立場で、あそこでまとめられなかつたら政府案になる可能性もあるから、僕もまとめなきゃいけないという立場です。

だから、何を考えていたかといえば、どうすればまとまるかということになって、二人とも自分が考えていた案とは違う結果になつたわけです。

しかし、二人とも、自分の考えていた案は個人的に考えていただけでどこでも審議していたものではなくて、終わつてからの愚痴話というか昔話としては言うけれども、全く現実的な話ではなかつたと思うんです。

○紅谷 小選挙区制での選挙は、平成八年が最初でもう八回の選挙を行つています。

○河野 小選挙区になれば死に票が多くて、本当に世論の大多数を代表するのかどうか。だから、比例代表を組み合わせて拾おうとしたけれど、その比例代表は、やってみたら小選挙区で落選した人を

救うような機能を果たし、少数意見を汲み上げるといふことにはほとんどなっていないと思うんです。

ですから、私はやはり失敗だったと思っっているんです。

○紅谷 そこら辺りの懸念というのは、選挙制度の議論の中で、小選挙区と中選挙区のメリットとデメリットを比較して、ある程度の議論はされていたと思います。

○河野 そうですね。あのときは田邊國男さんが政治改革特別委員長で、委員会では真面目な議論がされていたんです。しかし、実際は全く違うテーブルで話が進み、それから、民間政治臨調は全くの独自案を出して、国会での真摯な議論が余り評価されなかったというのがとても残念でした。

○紅谷 当時の議論では、そもそも日本に二大政党制、白黒をはつきりさせて、グレーの部分がないというのが日本の風土に合うのかどうかとか、死に票の問題もありましたし、小選挙区は本当にお金がかからないのかとか、随分いろいろな意見がありました。それで、二、三回選挙をやってみて駄目だったら変えればいいじゃないか、当時、小選挙区制に積極的だった議員もそう言っていました。

○河野 そうでした。ところが、それを二、三回やったときには、その制度で当選してきた人がマジョリティーになっているかもしれないから、もう戻れないですよ。

○紅谷 調べてみましたら、今の現職議員で中選挙区制での選挙を経験しているのは七十三名、約十六パーセントです。

政権交代があった平成五年の選挙が最後の中選挙区制での選挙で、岸田総理や安倍元総理が当選した選挙、当選九回以上の議員です。

○河野 だから、中選挙区制議連へ行ったときに思ったのは、小選挙区制は失敗だったと言ったけれども、元に戻せという気持ちはないかと思ったんです。元に戻せというのではなくて、このままでいいとは思わないから、更に改良された別の案に移行してもらえないかとい

う気持ちでした。

○紅谷 実際に先生も小選挙区で四回の選挙を経験されて、中選挙区時代との違いをどう感じられたのでしょうか。

○河野 僕は新自由クラブ時代があったから、とてもやりにくかったんです。つまり、中選挙区で三人でやっていたのを、小選挙区にその三人を割り振って、新たに保守の固まりを作らなくてはいけないけど、僕は新自由クラブで自民党と敵対していたから、選挙区で自民党公認になっても絶対にならぬです。場合によっては、あいつらとは嫌だから向こうに行くとか、選挙には関わらないとかとなつて、オール保守というのはできないんです。

具体的に言うと、隣の選挙区で僕を応援していた河野後援会が、違う候補者と一緒になつてどうなつていくかというところ、河野後援会の幹部連中が向こうの選対へ行つて、組織の中で下の方へは行きたくないわけですよ。ところが、向こうはそんな偉そうなことを言っているのは要らないとなつて、なかなか融合しないんですね。何年かたてば一つになつたと思うけど、二度目、三度目なんかはますます悪くなつていましたね。

それから、小選挙区の候補者になれば絶対当選するから、候補者になることが非常に難しくなる。難しくなるというよりは、候補者を選ぶということが最大の問題になる。

イギリスに行くとき、予備選挙みたいなのをやって当選した人が候補者になる。イギリスの場合には、候補者を選ぶということがとても重要で、よさそうな人を党本部がストックしておくようです。

ところが、日本の場合には、その地域で候補者を選ぶとしてもなかなか見つからないし、選ぶといたつて誰が選ぶのか、論文を書いたつて、それを読んで誰が判定するのか。

しかし、そういうことをやらないと、小選挙区というの中選挙区よりもはるかに現職優先で、活性化が非常に難しくなるという問

題もあるんじゃないかと思うんです。

それで、候補者選定が非常に難しいから、だんだん執行部に権力が集中して、何とかチルドレンみたいなのがその都度出てくるのも、マイナスの要素に働いたかもしれないですね。

○紅谷 自民党という政党には、非常に幅広い意見、右から左までの様々な意見があつて、それを聞いていれば政策の是非が分かると言われていると思いますが、小選挙区になって、党の方針に反するような意見はなかなか言えなくなつてきているのに比例して、人の幅も狭まつてきたのではないかと言われていますが、如何でしょうか。

○河野 余りなじまない話かもしれないけれど、かつての東京二区というのは、菊池義郎さんから宇都宮徳馬さんまで、要は極右と極左と言われた人がいたんです。それでもやはり二人とも自民党の公認候補で当選してくるんです。あの選挙区の比較的リベラルな人は宇都宮さんを応援するし、非常に保守な人は菊池さんを応援する。両方出てくるけどどっちも自民党だということ、自民党は非常に安定した幅広い支持があつたんです。それが一人になって、保守の方が五一%あれば全部保守で、四九%のリベラルは完全に排除されるから、それは党から出ていくというか別の党を支持しなきゃならなくなる。

そうなる、以前から自民党がやっている、業界団体一つにすることは、政策も非常に一方的になりますよね。

○紅谷 私が、現場の委員会にいた頃は、自民党の理事が四人から五人いて、自民党の中のシステムとして、それぞれの派閥から理事を出してましたから、時々意見が違ふことがあつてどっちなんだと思つたことがありましたが、今は全くそんなことはないでしょうね。

○河野 あの頃は、初めは意見が全然違ふけど、総務会は最後は全会一致でなきやいけないという、相当議論をして撫でたり賺した

りして、金平糖みたいな法案をパチンコ玉ぐらい丸くして、それでもどうしても駄目なら、悪いけれども欠席してくれと言って全会一致をつくる。反対だけれども、全会一致が党の伝統だから欠席して文句は言わないという、暗黙のルールがずっとあつたんですね。

ところが、それがだんだんなくなって、多数が全て正義だということになつてきたんですね。

○紅谷 国会審議活性化の議論の中で自民党の意見の一つとして、最終的な意思表示をする場合は本会議だから、委員会までは党議拘束はせずそれぞれが意見を述べて、本会議は自民党として一致した表決の態度をとる、というのも国会審議活性化の方法じゃないかという意見がありました。

○河野 採決は、委員会では数えるけど、本会議では数えないからね。それは何かといえば、何党は賛成で、何党は反対だということがかつてから、数える必要がないわけですよ。

それから、比例代表で党が選ばれて、党の名簿で上位が当選するから、こういう言い方は本当はよくないかもしれないけれど、自分が選ばれたのではなく自分が属する党が多数を占めて、その多数の意見を自分が言っているみたいなどころがあるから、特に比例で選ばれた人が党の主張と違う主張をするというのは理屈が合わないですよ。この頃は、そういうことがあつても多少は認められるみたいだけでもね。

だから、比例で当選した人は、離党してどこかへ行くなんていうのは本当はおかしいので、次の名簿の人が上がってくるべきですよ。○紅谷 比例の人は、他の政党に移ることはできませんから無所属になつていくのですが、筋論からいうと、議員を辞めるべきでしょうね。

○河野 本当はそうですね。辞めて次の順番の人が繰り上がる。比例代表というのはそういうものだと思います。

だから、選挙というのは本当に難しく、一票の重さは平等でないといけないということになると、それは全国区の選挙をやる以外にないですよ。県単位でやったってブロック単位でやったって、一票の重みは相当違いますからね。ところが、全国区でやれと言われると、これはこれでまた知名度の高い人がいいとか、全国的な組織を持っている人でなければできないとか、それから金がかかり過ぎるとかといういろいろな問題がある。

それからもう一つ、細川さんも言っているけど、やはり選挙制度を見直すときには衆議院と参議院の両方を見ないと、一方だけ変えても駄目なんですよ。だから、あの時は参議院はあれでいいという前提で衆議院を変えたけれども、実は、一票の格差ということから考えると、参議院の方に物すごく問題があったのに余り議論されなかったですね。

何度も言うけど、宮沢さんの本心は腐敗防止法でした。とにかく政治資金のスキヤンダルを撲滅する、腐敗を撲滅することが大事だという議論をしないまま細川内閣になって、中選挙区か小選挙区かみたいな議論で、小選挙区だということになった。

自民党が抱えていた問題もあるし、細川さん側も抱えていた問題がいろいろあって、生煮えというか本当に完全に議論し切った結論じゃなかったですよ。

○紅谷 四半世紀経って、小選挙区制で八回の選挙をやって、当時は、小選挙区制に変えれば二大政党制になって政権交代が可能になると言い、実際に政権交代はありましたが、今ののように、野党第一党が分裂して百人もいないような状況。それに加えて、それ以外の政党、公明党や共産党は、ずっと残っています。政策論争が起きて、政権交代が実現したのかについては、著名な学者が全く間違いだっただと言っています。

今の政治状況から、選挙制度を変えるといえるのは難しいですが、

今できることは何なのか、お話のように、比例の重複立候補の問題や、政治資金の問題とか、議論すべきことがあるのでしょね。

○河野 最近の広島の問題もそうだし、議員の政治資金にまつわるスキヤンダルを考えると、政党交付金として公費助成されているのだから、もっと深刻に考えないとだめですよ。税金が使われているのに麻痺状態というか、本当に困った状態だと思いますね。

それと、腐敗防止とか政治に対する信頼を回復し維持するというのは、本当に無限の改革をやっていく気がないとできないけれど、さればといって、落ち着かない制度でも困るんですよ。

総裁になる前でしたが、二大政党というのはうまくいくかという議論を随分やりましたよ。野党の人たちに言ったのは、二大政党にして政権を取ろうと思ったら、できるだけ主張が寄っていかないと、国民は全然違っている船には乗り換えられないので、近くなければ駄目だと。

ところが、近いなら変わっても仕方ないじゃないかという議論も一方にはあって、そういう議論を延々していくと、やはり二大政党というのはいまうまくいかないかもしれないと言ったりしたことがあります。

いずれにせよ、二つの政治勢力、替われという勢力と従来の勢力とが、民意をもう少し幅広く反映するということが必要なんじゃないですかね。

○紅谷 早晚、次の総選挙があるのは任期から確定していますから、そういう原点に立ち返って、選挙制度なり政治資金の問題を、もう少し議論してほしいなという思いは、当時の議論を知っている一人としては期待したいところです。

○河野 本当にそうですよ。ほとんどその当時を知らない人ばかりで、そんな議論があったのかみたいな話で、本当に情けないけれどもね。

広島の事件が起こったら、こんな事なら公費助成を受けるべきでないとか、もう止めようという反省の弁が少しは出てきてほしい。

だって、自分が納めた税金は自民党に行ってほしくない、社会党のために税金を納めているんじゃないという人もいっぱいいるわけだから、もらっている政党の方はそのくらいのことは感じてもらわないとね。

政治改革は大失敗なんと言っちゃいけないけれども、本当にもう少し時間をかけて真剣に議論をしてほしかったということですね。

○紅谷 しかし、衆議院の講堂に並んだお二人の写真が、政治改革の証として新聞の一面を飾っていますのでね。本当に寒い冬の夜でした。

○河野 つらい話だな。雪が降ってね。私は、あんなところに講堂があるのを知らなかったよ。

《自社と連立政権の樹立》

○紅谷 細川内閣は平成五年八月に連立政権としてスタートし、政治改革法案を成立させましたが、細川総理の佐川急便からの借入問題で自民党から厳しい追及、突然の国民福祉税の表明、更には社会党はじめ連立内での不協和音が起きて、翌年四月には退陣を表明し、羽田内閣が成立しました。

連立内閣では、社会党との関係がぎくしゃくして、新生党、改革、民社党で、社会党抜きで改新という会派を結成して対立し、羽田内閣は発足したものの、社会党は閣僚を送らず連立から離脱してしまいました。

羽田政権は少数与党になり、予算は通しましたが、その後、羽田内閣不信任決議案が出されました。自社で可決必至という状況になり、羽田総理がどうするのか、場合によっては解散もあり得るとい

う話もありましたが、その時点で、選挙の新たな区割りが出来ていませんでしたから、そこで解散すると中選挙区での選挙ということになるということも起因していたと言われ、結局は総辞職しました。そこで、自社連立へと進んでいくのですが、そこら辺りの経緯をお聞かせください。

○河野 とにかく政局が不安定でした。

連立内閣は、細川、小沢、武村という連携が全然うまくいかないんです。本来はその三人が固まればしっかりしていたはずなんですけど、細川さんと武村さんは途中から全然駄目で、小沢、武村というのは全く駄目。それから、細川、小沢は、小沢さんが言うことを聞かせているというだけで、お互いの共通認識というのは全然ないよ

うで、ぐらぐらですよ。

そういう中で小沢一郎さんと公明党の市川雄一さんのいわゆる一・ラインという非常に強硬な路線が顕在化してきて、何を考えているかというところ、社会党を外さないと安全保障政策がうまくいかなから、社会党を外そうと言って、民社党をたきつけ大内啓伍さんがそれに乗って、改新という会派を作って社会党を外すわけです。

社会党は連立内で最大会派でしたが、小沢さんは、社会党を外しても自民党から相当数が取れると考えていたんです。

それは自民党にとって対岸の火事じゃなくて、こっちに火の手が回っていることだから、自民党の総務会なんかは全然議論が落ち着かないんですよ。例えば、内閣不信任案を出せば潰れるのは分かっているけれども、不信任案を出すべきでないという議論が結構あったんです。僕は総務会で出せと主張したけれども、駄目だというんですよ。社会党はまだ向こう側にいるのだから、自民党が不信任案を出しても通らないと言いつつ、出して通らなかつたら総裁が腹を切るのかみたいな話が毎日のようにあったんです。

僕は、羽田内閣は全然駄目だと最初から思っていたけれど、なかなか潰せないでいたんです。

ただ僕らは、社会党もそうだけれども、予算を通すまでは羽田内閣でいこうと思っていました。連立内閣が作った予算だから社会党は賛成せざるを得ないけど、予算の賛成と不信任案の賛成とは必ずしもイコールではないと言っていたんです。

だんだん潰れることがはつきりしてきて、潰れたときに総辞職して、直ちに首班指名をどうするかとなり、解散すれば選挙かもしれないということ、僕はどっちでもいいと思っていましたが、党内にはそうでない人もたくさんいて、荷物をまとめて向こう側に乗り換えるか、いつ乗り換えるかと考えていた人たちは困っていたんです。

結局、羽田さんは予算が通ったら総辞職すると言っています。羽田さんと社会党の話合いでは、総辞職するけど、首班指名のときにはもう一度羽田が出て支持するのでどうだという話もあったんです。しかし、社会党の中で、そんなばかなことはできないから、必ずしも羽田じゃないよという話になったんです。

その辺りから、自社さ、さは全然最初は頭になかったけど、自社連立でいこうと僕らは考えて進めることになったんです。芥川龍之介の「藪の中」じゃないけれども、俺がこうやった、俺がああやったと言っているけど、みんな違って、誰が進めたのかよく分からないんですよ。

それで誰を担ぐかとなって、自民党だけでは十何票足りないから、自分が出て勝てないことは分かっていたけど、僕がそれを言う前に、加藤紘一君が村山富市さんでいいんじゃないかと言いはじめたんです。加藤君はその頃、自治労と一生懸命話をしていたらしいけど、やはり僕に対して多少意識があつて、河野を担ぐよりは、社会党でもいいんだという気持ちがあつたんじゃないかと思えますね。僕は、自民党内からそういう声が出るかなとちよつと思っていたので、村

山でいいんじゃないかと話をして、村山さんでいこうということになっていったんです。

みんなそれぞれ、野中さんは野中さんで、亀井さんは亀井さんで、それから村上さんは村上さんで、自分のパイプで社会党と話していたけど、まとまった話は余りなかったんです。そもそも村山さんという人はとても真面目な人で、そういう話には一切乗らない人でした。

それで、村山さんがボタンを押さない限りどうにもならないと思って、僕は何もしなかったけれど、森さんが飛んで歩いて、とにかく自社で手を組まない和不信任案も通らないし政権も戻らないから手を握る。社会党と組むには村山を担ぐ以外にないと、自民党の中には社会党と組むのは絶対駄目だという議員もいっぱいいたのを、何とかなだめたんです。

一般の人は、社会党は相当閣僚ポストを渡せばこつちに乗るだろうから、自社政権でいこうと思っていたんです。それでも、まさか村山さんが首班とは思っていなかったんです。

しかし、いろいろ考えてみて、村山政権でいこうと言えば恐らく社会党はまとまるだろう。自民党はとにかく与党に戻りたいから、総理大臣になるよりもまず与党になる方がハッピーなわけです。だから、僕らは、別に総理大臣じゃなくても与党になればいいことにしようじゃないかと結論づけたんです。

○紅谷 自民党が政権への回帰志向が強かったのは傍から見ても分かりましたが、それでは、自社政権の推進というのは、誰かが中心になって進めたということではなくて、いろいろな人が社会党にアプローチした結果ということですか。

○河野 そうです。いろいろな人がやっていたんです。不思議なのは、自民党とさきがけでも過半数にはぎりぎりなつたはずなんだけけど、自民党を批判して出て行ったさきがけは全然ターゲットじゃない

かつたんです。最後は連立で一緒になったけど、考えてみれば、さきがけと組むのが一番よかったのかもしれないですよ。

後藤田さんが元気でいれば、きっと細川さんか武村さんと呼んで一緒にやろうじゃないかと言ったと思うんですよ。後藤田さんが言えれば、どちらかは分かりましたと言ったかもしれない。

○紅谷 自民党が社会党と連立を組むに当たっては、長年の対立があり、政策面での一致についてはどう考えていたのでしょうか。

○河野 僕はそれは全然心配してなくて、社会党は既に小沢さん達と組んで政権を作ったのだから、我々の政権に入れないはずはないと思っていました。だって、少なくとも我々よりはずっと右の連中と組んでいるんだから組めないはずはない。だから、僕は政策的には全然心配していません。もちろん、具体的には安保条約をどうするかとか、憲法をどうするかとかという問題はあるけれど、それは乗り越えられるだろうと思っていました。それで、党首会談の前に政策協定をチェックしたら、社会党とさきがけの政策協定があつて、それを参考に龍ちゃんが呑めるような案を作らせたんです。

橋本君は、社会党との連立には積極的ではなかったから、初めは全然見もしなかったけど、訳を話すと、そうかと言って封筒を取り上げて、テーブルには着けるなと言ったんです。それでトップ会談の準備に入ったんです。

○紅谷 社会党の中には、久保書記長や山花さんなど、連立に残るべきという人たちもいました。

○河野 久保さんたちは、連立政権で大事にされていたというか、話の輪の中に入れてもらっていた人達ですよ。

一方で、官房長官をやった野坂さんは、連立が改新という会派を作って社会党を外したから、自民党と組んでもいいんじゃないかと思っていたんですよ。だから、森さんは社会党と手がかりがなかったのを、小里、野坂の国対委員長同士のチャンネルを使って、党首会談をやる以外にないと野坂さんに言う。野坂さんは久保さんを飛ばして、村山さんへ一直線に行っていたんです。

とにかく久保書記長は、うんと言わないんですよ。そして、村山さんという人は物すごく真面目な人だから、連立の一翼を担っている以上は無責任なこととはできないから、向こうとの話が終わったらこっちへ来ますと言っています。

もう時間がなくて最後の場面は、森さんが小里国対委員長を使って、幹事長・書記長会談をセットして、森さんが久保さんに党首会談を提案するんだけど、その前に僕のところへ来て、河野さん、村山さんを担ぐのでもいいかと言うから、それでいいよと言って、それから村山擁立が本格的になっていくんです。

久保書記長は、村山擁立の提案を持ち帰って、後からトップ会談をやりましょうという話になったんです。

○紅谷 村山さんを担いで自社で一緒にやっていくという話は、当然ながら極秘裏に進められていました。私は、当時は議運にいましたが、与党側の筆頭が森井忠良さんという人で山花さんの側近、二番手は山下八洲夫さんという村山さんの側近でした。それが、ある会議から、突然、筆頭はこれから山下がやりますからという話で、それは自社で組むということだったので、事務局は理由が分からず、驚くだけでした。

河野・村山会談は、首班指名前日の夜に院内の常任委員長室で開かれますが、この段階で、さきがけは入っていませんが、そこはどのような交渉経過だったのでしょうか。

○河野 これは、もう言ってもいいだろう。

首班指名の本会議の二日か三日前に、高輪プリンスホテルで、河野、村山、武村の極秘のトップ会談をしたんです。マスコミは何となく匂って張り込んでいたから大変だったんです。運転手さんに飛

ばしてもらって、各社の車を全部巻いたんだよね。あれは衆議院の運転手さんで上手な運転だった。目をつぶっておいってくださいよと言われたなあ。

結局、そこでは決まらなかったんです。一つの構想としてこういう構想があると言ったけど、武村さんは終始批判的だった。それはそうだよ、彼は自民党を離党した直後だからね。

しかし、武村、田中秀征と村山、野坂というのはべったりだったんです。

○紅谷 いやいよ河野・村山のトップ会談に進んでいくのですが、河野先生は村山先生とは、それまでに接点はあったのですか。

○河野 全然ないんですよ。僕はほとんど知らなかったですね。だから、連立で組もうかと言いだした頃から村山という人をちよつと研究しましたけど、真面目な人でしたね。僕は、社会党にあんな真面目で全然はつたりがない人がいるというのに驚いたほどでした。

○紅谷 首班指名の本会議前日に、河野・村山会談で自社さ政権で村山さんを総理にという話をされますが、そこでのお二人の話を聞かせていただけますか。

○河野 本当に最後の段階、もう時計を見ながらでしたよ。

そこには、村山さんと野坂さんがいて、僕が村山さんに総理をやってくれと言ったら、村山さんは、いや、河野さんがやるべきじゃないか、あなたは第一党なんだから、あなたがやりなさいと。いや、私がやっても十票か二十票足りないから駄目なんだ。社会党は私を担いでも入れないだろうけど、あなたが立てば自民党はみんなあなたに入れる。何で、あなただと社会党が崩れ、私だと自民党は崩れないのかと言うから、自民党は何が何でも与党になりたいから自民党は絶対入れるけれども、社会党は私が立って私には入れないから、勝つためにはあなたが立つ以外にないんだという話を小一時間したのかな。そこでは、社会党と連立側との最終協議が翌日だったから、

村山さんは党に持ち帰ってから返事をするということだったので、終わったんです。

○紅谷 いやいよ首班指名当日になりますが、本会議前の両院議員総会では村山擁立には反発があったようですが。

○河野 村山擁立論は、何で社会党なんだと全然雰囲気は良くないんです。両院議員総会の最中に、中曽根さんが、離党して連立側にいった海部さん支持という記者会見するというメモが来りましたよ。僕はここまで来たらしようがないと腹をくくっていたけど、その時に佐藤孝行さんが中曽根は間違っている駄目だと言って、とてもきつかったんです。正直言うところの頃は、もう中曽根と違って、別に議員の一人だという程度で、大魔神とは誰も思っていないませんでした。

逆に、中曽根さんが海部支持となったので、社会党は急にまとまったと言っていましたね。両院議員総会では、平井卓志会長が、結論が出ないなら打ち切る以外にないけれど、そうなると思はれちゃくちやになると思っていたら、衛藤晟一君が出てきて、自分は村山さんと同じ選挙区で敵対候補だが、その僕も政権復帰のために村山さんに一票入れると言ったら、ガラッと雰囲気が変わったんですよ。本当に、腹をくくって、もうなるようにしかならないと思った修羅場でした。

本会議が始まる前に、院内の幹事長会議室に村山さんが来てくれたので、村山首班を確認したんです。その直前だったか、海部さんが離党して首班指名に出るという話で、僕と森君と橋本君がいるところへ来ましたよ。

○紅谷 いやいよ首班指名の本会議に入っていくのですが、自民党の中でも、海部さんに投票した人、棄権した人、河野洋平と書いた人もいて、結果は村山二四一、海部二二〇で過半数に達しなかったんで、決選投票になりました。

一回目に自民党で海部と書いた人が二十六人いましたが、二回目では十九人になりました。

○河野 どうしても村山と書けない人がいたんだよね。中曽根さんもそうだったのかな。

○紅谷 中曽根さんは、一回目の投票のときは本会議に入るのを中曽根派の人に止められて投票できませんでしたが、決選投票では海部さんに入れました。

三十分間の休憩の後の決選投票では、村山二六一、海部二一四で、村山さんが内閣総理大臣に指名されました。決まった直後に、森幹事長側近の中村正三郎さんが、社会党の野坂国対委員長に駆け寄った光景が印象的でした。

○河野 村山さんが決選投票で首班として指名された後、自民党は院内の議員総会の部屋で待機して、そこへ村山さんが就任挨拶に来られた。村山さんは、この部屋に入ったのは初めてだけれども心配はしていない、誠意は必ず通じると言うと言って、短いけれどもとてもいい挨拶をして帰っていかれました。

《自社と政権の歩みと政権移譲の打診》

○紅谷 村山総理が誕生し、自社と政権での組閣になりますが、大蔵や外務の主要閣僚の分担、さらには自民党の派閥からの推薦等の問題もあつたかと思いますが、自社と連立政権での組閣の経緯や方針についてお聞かせください。

○河野 その前段としてつけ加えたいのは、僕が自民党の総裁になって、細川内閣に対して本会議で代表質問をしたんですね。その中に憲法問題も多少入れて質問して、それが社会党からは拍手が上がって、自民党の中からはすぐ野次が飛んで、どっちの代表だみたいな話があつて、そのときに、自分の主張というのは、自民党の総

意では必ずしもないということも分かっていたけれども、改めてそこで知らされたという感じがありました。

そういう前段があつたから、村山さんを説得するときにも、社会党側はやや安心していた部分があつたと思うんですね。いろいろな人が村山さんを口説いたけれども、最終的に村山さんが引き受けてくれたのは、村山さんや野坂さんの周辺に、河野という人間のリベラルさに対する許容というか安心感があつたんじゃないかという自負があるし、他の人だったら村山さんは受けていないと思います。

我々が、村山さんが首班指名されて良かったと言っていたら、村山さんが会いたいから来てくださいという連絡があつて、行ったら武村さんも呼ばれていて、村山さんから、両党に支えられて首班指名を受けたので二人には責任を持ってもらおう。については、大蔵大臣か外務大臣かを二人で相談して受けてくださいと言われたんです。

僕は明日返事をしますからと言って、宮沢さんのところへ行つて大蔵か外務かどっちを取りましようかね、僕は自民党にとっては大蔵大臣が重要だと言ったら、宮沢さんは、絶対外務大臣をやってくださいと言われるんです。ただでさえ社会党首班ということでアメリカがすごく心配して、これは大変だということになっているから、自民党の総裁が外務大臣になって、外交政策、日米関係は揺るがない、外交政策は不変だということをちゃんと知らないと言われないと日米関係がおかしくなります。アメリカとの協調が大切ですから、絶対外務大臣を取らなくては駄目ですと言われたんです。

次の日の朝一番で村山さんのところへ行つて、外務大臣をやりますと言ったら、武村さんも外務大臣と言ったけど、私がやるんだったら、じゃ大蔵大臣という話で、村山さんにしてみれば、そこで柱二本が決まり、官房長官は社会党が取るんですね。

実は、その前の晩に、石原官房副長官から電話があつて、村山さんに続けてやってくれと頼まれて、固辞したけれども、とにかく政

治改革ができ上がるまでやってくれと言われて引き受けましたが、官邸に自民党が一人もいません。総理が社会党で、五十嵐官房長官が社会党、園田官房副長官がさきがけで、自民党は誰もいないので宮内庁との連絡や関係がうまくいくのか心配でしたが、村山さんの言うとおりにするしかなく、自民党は官邸なしでしょうがないという事になったんです。

そこから先は、森幹事長とか、社会党は久保書記長、さきがけは田中秀征さんだったか、幹事長クラスが集まって組閣の相談をしたんです。それで、議員の数と比例して大臣は、自民党が十三人になった。誰にしようかというので、それは、派閥に割り振ったわけではないけれど、緊急事態でやむを得ない従来の自民党の手法でやりましたよ、特別な人事は田中真紀子さんだけです。

森さんだったか、女性を入れた方がいいだろうと言うから、話題性はあるから田中真紀子がいんじゃないか、初めて当選していきなりだけど、彼女なら何とかやるだろうと思って呼んだら、やりましょうと初めは二つ返事で引き受けたけれど、帰って考えたら環境庁なんか嫌だ、科技庁ならいいみたいなことを言っただけで替えたんですよ。

○紅谷 いよいよ村山自社さ政権がスタートし、閣僚の顔ぶれを見ると、野中さん、亀井さん、与謝野さんという、主要ポストは自社さ政権を考慮した人たちが就いたように見えます。

その後は、すぐにサミットを控えていました。村山総理は、最初の出番がいきなりサミットというのは、非常に不安だったのではなかったでしょうか。

○河野 本当に緊張していたんですよ。

僕もそうだったけど、認証式が終わって役所へ戻ると、すぐサミット用の資料がどんと来るんです。僕の資料は外務省関係だけだけど、総理のところには各省が資料を持ってきて、村山さんはすぐサ

ミットの勉強を始めたんです。

僕は、サミットは首脳会議だから、外務大臣はついていくだけだと思っていたら、おせっかいな秘書官がいて、総理は大変だから勉強会に行つて一緒に聞いたらどうですかと言いに来たけど、人の分まで聞いていられないと言つて行かなかった。ところが、それが後になって大失敗だったんです。

そうしたら、秘書官が村山さんは本当に真面目にやるけれども、日に日に萎えてきていて大変だと言うんです。それで、サミット経験者の話を村山さんに聞かせた方がいいと思つて、宮沢さんに頼んだら、私が話をしましょうと言つてくれて、官邸に来てもらいました。それで総理と二人になったら、宮沢さんは、総理は英語の心配はまるで要りません、コールだったか誰だかも英語が全然できませんから、英語なんか話す必要はまるでないんです。それから、話題はいろいろあるけれども、サミットは勝った負けたという場じゃなく自分の経験談みたいなものを話す場ですから、アメリカとヨーロッパの人が、アジアの問題、例えば中国とか韓国、北朝鮮の話なんかは、みんな喜んで聞きますから、そういう話をして、ほかの話のときには別に聞いていなくてもいいし、誰だったか自分に関係のない話のときにはずっと絵葉書を書いていましたから、それで大丈夫ですからと言うんです。村山さんは、ああ、そんなもんかね、ほうほうほうと言つて。それで少し気が楽になったんですよ。それ以来村山さんは元気になったという話でした。

それで、組閣から五日目か六日目にもう飛行機に乗って行くので、こっちも何だかよく分からないままついでに行つたんです。

○紅谷 六月二十九日が首班指名で、三十日に組閣、ナポリ・サミットは七月八日からですから、準備期間は余りなく、慌ただしい出発だったようですね。

○河野 一週間なかったですよ。しかも外務省が心配して、他の国

はどこも来ていないのに、初めてだから早く行った方がいいとか言
って一番先にナポリへ行ったんです。先に行っても相手がいないか
らカプリ島で休養していたけど、村山さんは行かないで一生懸命勉
強していた。

そうして、いよいよ明日から始まるというときに事件が起こるん
です。

まず、首脳のデイナーパーティーのときに、村山さんが下痢をし
て途中で病院へ行った。それを僕は初めは知らなくて、報告を受
け、これはえらいことになったから病院へ行こうと言ったら、そん
なことをしたら大騒ぎになるから、今夜は知らぬ顔していてくださ
いと言うので、園田官房副長官だけが病院へ行って、ほかは誰も行
かなかった。

それで、病院の園田君から電話がかかってきて、もう落ち着いて
大丈夫で、本人は帰ると言っているけれども、イタリアの医者が、
明日までいてくれと言うので帰れないけど、元氣だから大丈夫です
と。だけど翌日からサミットが始まるのに大丈夫なのかと言ったら、
大丈夫だと言うので、じゃ、まあいいやと言って部屋に帰ったら、
今度は電話でたたき起こされて、北朝鮮の金日成が死んだというん
です。

北朝鮮で暴動が起こるかもしれないとか、難民が韓国へ入ったら
韓国が大騒ぎになってえらいことになるよとか言うけど、どうしよ
うもなく、とりあえず韓国の外務大臣に我々はあなたの側にいるとい
う電話をかけて、何事もないと言うので電話を切って、寝ようと思
ったらまた起こされて、村山さんが明日のサミットの会議に出られ
ないと言っていると言っています。

それで、これは大変だ、誰が代わりに出るんだと言ったら、外相
が出ると言っています。総理の勉強会をサボったから何をやるか分か
っていないけど、もう明け方三時か四時ぐらいだから、なるように

しかならないと思って寝ちゃったんだ。

次の日は朝から会場へ行くんだけど、到着する順番が私が一番早
いんです。というのは、新顔ほど早く呼ばれるから、日本の総理が
一番在任期間が短いので一番最初。しかも代理だから会議場へ一
先に行ったんだ。カメラマンがいっぱいいるけど、僕が行ったって
違うのが来ているから、名簿なんか見たってわからないですよ。

入口では、イタリアのベルルスコーニ首相が待っていて、僕が入
っていても全然知らないから、日本から来たと言ったら、驚いた
顔をして村山はどうした、元氣かと言うから、病院にいますけど
元氣になりますからと言ったら、それは良かったとか言っているけ
ど、向こうはイタリア語で何を言っているか分からないんだ。

サミットの会場は、会議室へ入ると真ん中に丸テーブルがあつて、
シエルパが一人入るだけで誰も入れないんです。あのときは外務審
議官の林君がシエルパだったけど、私も大臣になったばかりで余り
知らないし、林君は部屋の一番隅っこに座っているから全然連絡な
んかできないんだ。

会議は、冒頭から株価が高過ぎやしないかとか、とにかく昨日、
今日の話ばかりで、全然分からないんです。この株価を安定させる
ためにどうするかとか結構みんな自由にしゃべって、それで、クリ
ントンが何とか会議をつくるかと言い出して、私は取りあえず反対
だと言った。敏感な株価のことだから、いきなり会議をつくるうな
んて言うと、それが元になって株価がまた上下する可能性があるか
ら慎重にやるべきではないか、これはまず大蔵大臣会議にでも一遍
降ろしたらどうだと言うと、ベルルスコーニがそうだとするので、
それはそうなんです。私の発言はその一度だけでした。

そんな話を昼までやって、昼食会は首脳だけだったので私は入
らず、外務大臣会議が別の会場でやっているの、そこを抜けて外
務大臣会議に出たんです。そうしないと外務大臣の顔合わせが全然

できないからね。それで終わってまた午後の首脳会議に戻ってきたんです。

○紅谷 今のサミットは首脳と各大臣の会議は時期と場所を替えて行っていますが、この当時は一同が集まっていたのですね。

○河野 そうなんだ、同じ場所だった。

あのときは、武村さんと橋本さんと僕の三人が行ったんです。外務、大蔵、通産と行ったんだけど、各国は外務、大蔵しか来ていなくて、そもそも通産は呼ばれていなかったんです。橋本君がどうしても行くというので行っただけ席がないんです。橋本君が怒って、外務省の準備が悪い、こんなことなら帰ると言うので、外務省は大騒ぎしていましたよ。

話が前後するけれども、サミットが始まる前に、村山さんとクリントン大統領の日米首脳会談をしたんです。

それで、もし村山さんが硬くなつてうまくいかなかったらもう終わりだということで、武村さんと橋本さんと僕がホテルまで付いて行くけど部屋には入れないから、まず村山さんが一人で三十分だけやるというんです。うまくいけばいいがと思っていたら、三十分が、四十分たつても五十分たつても全然出てこないんですよ。それで、何かとんでもないことになったんじゃないかと言っていたら、村山さんがここにこしながら出てきたので、どうでしたと言ったら、面白かったよと言うんだ。

それで、帰りの車に村山さんと乗って聞いたたら、なかなか話のよく分かる若い人だ。若いといつたつて、二、三十歳違う子供みたいなもんだけど、なかなかいい、面白い若い衆だと。生い立ちから何かをずっと説明して、漁師の出だと言ったら、向こうもどうとかと言つて、何かすごく気が合ったと言うので、ああ、よかったよかったですというのが前段にあったんだ。だけれど、その日の晩飯で村山さんは倒れちゃうんだ。

翌日の首脳会議が終わって夕食会なんだけど、村山さんは夕食会も出てこないんです。それで僕はまた夕食会に呼ばれて行きました。次の日から村山さんは出てきたので、それから後はずっと外務大臣会合に出ていたんです。

○築山〔衆議院事務局〕 首脳会議では、サミットにロシアを呼ぼうという提案に反対されたようですが。

○河野 そうです。

ロシアが、核兵器を使わなくするよう処理する金を出してくれと言つていて、それを相談するのにロシアも呼ぼう、そして仲間に入れようという提案で、僕は一人で反対した。

日ロ関係には領土問題という難しい問題があつて、そう簡単に賛成するわけにはいかない。大体、お金を幾ら出してやるうかという話に、本人が来て一緒に話をするのはおかしいじゃないか、金を出す相談は私らだけですればいいんじゃないのかと言ったら、コールが、ドイツは物すごくお金を貸し込んでいるものだから、エリツィンは非常に大事な仲間だから彼らを入れて相談をする必要があると、それで、そうだとおっしゃって、みんな賛成なんだよ。

ここでは、僕が晩飯会に中国を呼べばいいのと言ったのが話題になって、ロシアを呼ぶくらいなら中国を呼んだらどうだと言ったら、メージャーが、中国が来たがっていないよと言つて、話は終わりになつてしまった。

ロシアを呼ぶことについては僕が孤立していたけど、フランスのシラク大統領だけが、日本の言うのは一理あるんじゃないかと助け船を出してくれました。それ以来、シラクとすごく仲よくなったんです。一週間目でそんな大きな会議に出たので、逆に一週間で各国首脳と全部会えたから、それから先は楽でした。

帰ってきて一月たたないうちに、今度は日韓首脳会談をやったんです。村山さんが、俺は韓国って行ったことないから一緒に行つて

くれと言うんだ。あの頃の社会党は韓国とは駄目で、行ったことないからと言うけど、僕も行ったことなかったんだ。

僕は金大中さんと仲がよくて、金大中さんが死刑判決を受けて、やっと思赦になったところだったから、そんな国は行かなかったんだ。自民党で韓国へ行かない数少ない議員の一人だったけど、村山さんと二人で韓国へ行きましたよ。

行ったら、先方は金泳三大統領で、会談はすぐ良かったんです。あの頃は、河野談話の後で、韓国と日本との関係はよくなりつつあって、割とうまくいきました。

○紅谷 村山政権発足後の外交の話がありましたが、ナポリ・サミットから帰って一週間後ぐらいから、臨時国会が始まりました。村山内閣の実質的なスタートで、所信表明演説になります。

自社さ政権のスタートに際しては、署名もない口頭での政権合意でしたが、新政権への代表質問ですので、自衛隊や安保条約の問題が論戦となることが予想されました。村山総理の所信表明に際しては、自社さで事前に話をされたのでしょうか。

○河野 それは、ないんです。

村山総理は、サミット前の日米首脳会談で、日米安保条約は堅持しますと言ったんです。五十嵐官房長官はびくりして、総理との打合せでは、日米安保条約はギリギリ維持するところまで言うといっていたのに、会談では堅持すると言って、もう一歩進んだんです。

社会党はびっくりして、僕らも、いいのかと村山さんに聞いたら、わしが総理になったからしょうがないと言うんだよね。もうそのときは、安保条約、それから日の丸・君が代は現状を認めるということで、腹をくくっていたと言っていたよ。

だから、所信表明でも日米安保体制堅持と言いましたよね。

○紅谷 そうでした。ただ、村山さんの回顧録では、本当は維持だ

つたけれども堅持と言ったから、そこからもう変えられなくなったと述べておられました。

○河野 社会党内の、五十嵐官房長官との打合せでは維持だったらしい。

日米安保体制は堅持しつつと言いつつ、自衛隊はあくまで専守防衛、必要最小限の防衛力ですね。

自民党と社会党との政策合意は、社会党とさきがけの合意事項というのが元々あって、それを土台にしたものでした。

○紅谷 それは具体的というより、主要項目を簡条書にしたようなものでしたから、村山さんは、具体的な項目についての合意事項は、後から共有するんだという言い方をされていたようです。

○河野 今にして思うと、あそこで村山さんに総理大臣を引き受けてくれと言つて詰めた話合いをしたけど、村山さんは、それを引き受けるときには、相当な変更を自分の責任でやらなきゃいけないという覚悟があつて、相当考えられたんだろうね。ただ単に嫌だと言つていたわけじゃないんだよね。

○築山〔衆議院事務局〕 社会党の党是に関わる政策ですからね。

○河野 結果、これがきっかけになって社会党は潰れちゃうわけだから、悪いことをしたよ。

どこかの時点で、さっき言った三党の摺り合わせが必要ということで、週に一度、三党首会談というのをやることにしたんです。

閣内では、玉沢防衛庁長官が、最初の閣議で立ち上がって防衛問題について意見を述べたいと言うから、僕は、玉沢さん、我々は村山内閣の一員だから村山内閣の方針に従って仕事をするので、いきなり立ち上がってそんなことを言うのはやめなさいと言って止めたことがあります。それ以来、もう彼は何も言わなくなりました。

○紅谷 お話があったように、日米安保の問題、自衛隊の問題、国旗・国歌の問題と、村山さんは総理になった以上は避けて通るわけ

にはいきませんでした。そうすると、世間的には社会党の譲歩ばかりじゃないかという印象が強かったと思います。

村山総理の発言に、本会議場で自民党から拍手が起りましたけれども、お聞きになっていて、どう感じていらしたでしょうか。

○河野 まあ、しようがないと思っただね。

それは、言ってみれば、社会党は名を取って、自民党は実を取ったという感じですね。自民党は総理大臣を譲るという最大の譲歩をしたわけだから、政策的なことについてはやはり自民党の主張をできるだけ入れないと国会が動かない、自民党内で駄目だと言ったら動かないわけですからね。それはもう村山さんはよくわかっていました。

○紅谷 しかし、政権を組んでいた社会党の中での評価は分かれていました。

○河野 社会党は、村山・野坂ラインと、久保・山花ラインとで分かれていて、久保さんは村山首班指名の直前まで、従来の小沢さん達との連立政権でいくんだと言っていたんです。だから、僕らは羽田政権の方がこっちより政策的にもっと右だから、羽田さんと組んで僕らと組めないはずはないと思っていました。

自民党は、総理を譲っただけでなく、原爆被爆者援護法、それから五十年決議等、いろいろなことでも相当譲歩したんですよ。

○紅谷 政権前半は、所信表明での発言や、消費税の3%から5%への引上げ、年金の支給開始年齢の引上げとか、社会党にとっては非常に厳しい政策判断をせざるを得なかったと思うのですが、その後は、今お話があった戦後五十年決議や村山談話になっていきます。

○河野 非自民の連立から社会党が出てくるタイミングにも、社会党は物すごくつらい思いをして出てくるんですよ。つまり、小沢、市川ラインというのは猛烈に右に振れていたから、社会党の主張がみんな拒否されて、久保さんが一緒にやろうと言うと、安保、防衛なん

かどんどんハードルが上がって、社会党が呑みにくいような話ばかりして、それで出てきたんですよ。

○紅谷 平成七年に入ると、政治日程に加えて、阪神・淡路大震災やオウム真理教によるサリン事件が起きました。

阪神・淡路大震災の一月十七日というのは、社会党の中で、山花グループが新民主連合を立ち上げる当日で、事務局は新会派の届けを出すという事前連絡を受けていましたが、あれで社会党の分裂がなくなりました。

○河野 そうでした。あの年は次から次へと大きな事件が起こったひどい一年だったね。

村山総理と一緒に訪米して帰ってくるときに、山花さんが新党を作って社会党は割れるという話をしていたんですよ。だから、全く内憂外患だったよね。

三月のサリン事件の日は、山本富雄さんの葬儀に行くというときに、霞が関を車で通ったら何か騒いでいるけど、何だか分からずに通り過ぎて草津へ着いたら、大変な事件だと知らされたんです。

○紅谷 サリン事件では、私は院内から第二別館の方を見たら救急車が止まっているんですよ。

それは地下鉄から人を救護していたのですけれども、しばらくの間は何だか分かりませんでした。

○河野 阪神・淡路大震災の日は議員宿舎にいて、明け方に必ず衆議院の公報が配られるんですよ。コソコソと歩いてきて、郵便受けにガシヤンと入るのでいつも目が覚めていたんだよね。その日もコソコソ、ガシヤンと来て、テレビをつけたら何か大変だ、何にも見えない、どうしたんだろうと。阪神高速がぐにゃつと曲がって道路が落ちていて、しばらく何だか分からなかった。

女房の実家が神戸なものだから、家は相当やられていたし、電話は通じなかったのかな。

○紅谷 ちょうど国会審議が始まる前でしたが、震災があったので予算も早く早くということ、四十年ぶりに二月中に上がって、国会の方はすんなりと終わりましたが、内閣は震災対応で大変でした。

○河野 地震が起こった日は閣議の日だったんです。宿舎には全然報告が入ってこなくて、とにかく官邸へ行ったら、橋本さん、野中さん、亀井さんなどは、ああなると張り切るんだよね。橋本君が大きな声でライフラインは俺が引き受けたとか言ってる、みんなそれぞれ各所を回って行けとか言っていましたよ。

僕は外務大臣で各国からの支援要請を受けていて、覚えているのは、スイスから世界的に有名な災害救助犬の部隊を是非使ってくれという話があったけど、農水省が動物防疫のルールで入れないと言っただね。話し合ってる、外務省が付いて現地に行ってもらいましたよ。

○紅谷 震災の影響で国会は与野党の対立もなく進んでいきましたが、会期末になって、いわゆる戦後五十年決議がありました。

野党第一党の新進党が欠席、共産党は反対。自民党の中にも反対、社会党の中にも欠席者が出ました。さきがけは、武村さんが欠席でした。

○河野 これは失敗だったね。与党で調整していたけれど、謝罪の言葉がないとかいってなかなかまとまらず、根回し不足もあったし中途半端だったね。

国会がそうだったので、村山さんが、官邸はきちっとしたものをかさなきやいけないということで村山談話になったんです。

○紅谷 国会決議は、三党の幹事長クラスで協議してもまとまっていなかったのですが、会期末だったので見切り発車になったということのようで、その反省から村山談話に繋がっていきます。

村山談話は、河野談話のところでお話がありましたけれども、河野談話が後からいろいろと言われたので、閣議決定をしました。

○河野 そうです。あれも途中で「の」を入れて村山の談話にしるという話が自民党の方から来たりして、これはいけないというので、ちゃんと閣議で決めなきゃ駄目だということになったんです。

実は、閣議もリスクはあったんですよ。村山さんは自分で随分電話して話をし、橋本君は初めは駄目だと言っていたけれども、村山さんからちゃんと話が行っていたんですよ。よくやりましたよ。

○紅谷 このような経過を辿り、自社さ政権は一年が経過しました。自民党は野党転落から再び与党に復帰しましたが、自民党は変わっていたのでしょうか。

○河野 自民党は十一か月の野党暮らしをしたわけで、その間の自民党はやはり相当悲惨だったんだね。だから、何としても与党に戻りたいという気持ちが強かった。

だから、首班指名選挙では、村山さんを担がなかったら、とにかく与党になりたいわけだから、もしかしたら羽田さんを担いじゃう可能性だってあったわけですよ。だけれども、自民党が分裂して来るなら歓迎するけれども、党全体で来たら第一党になっちゃうから分かれて出てこいと言っただね。

自民党を抜けて向こうに行こうみたいな動きもあって、あの頃は危ない毎日でしたよ。朝起きたら、今日は何人くらい離党届を持ってくるかなんて思っていました。

○紅谷 あの頃、自民党の議員が言っていたのは、野党というのはこんなに寂しいものなのか、今までは予算編成になれば人のごった返していたのに、全然人が訪ねてこない。何かしたくても何もできないから、早く与党に戻りたい、盛んにそう言っていました。

自社さ政権発足から一年後に参議院選挙があり、自民党は三十八人から四十六人に増えますが、社会党は惨敗で四十一人から十六人、新進党は逆に十九人から四十人になって、比例では第一党が新進党という結果でした。

この選挙をどう評価されたのでしょうか。

○河野 あの参議院選挙は、幾つか大事な点があったんです。

一つは、与党として勝つか負けるか。つまり、自民党だけじゃなくて、自民、社会、さきがけの与党でどのくらい取るかということが非常に重要で、自民党だけ勝っても社会党やさきがけが負けては駄目だから、選挙協力をやるかという話も一時あったけど、参議院で選挙協力はできないんですよ。自民党は全選挙区に候補者がいますから、社会党を推薦すると全面的に応援するところまでいなくて、こつちがちよつと遠慮するかという程度で、気持ちにはあつたけれども実際はできない。

選挙協力をやるうというのは、村山、河野、橋本とか森の周辺ではあつたけれども、現場では選挙協力なんてとてもできないという状況で、実態としてはできなかった。世間の評価として与党として勝つかどうか、その心は、社会党がひどく負けるんじゃないかという心配があつて、結果社会党は惨敗だった。

それから、自民党は議席数で増えたけれども、比例の票数で新進党に負けたことが大きなダメージだったんです。それまでも自民党の得票数はずつと減ってきていたんですが、それが決定的になったからね。

○紅谷 そういう選挙の結果を受けて、選挙当日の夜に、村山総理が河野さんと武村さんを公邸に呼ばれました。そこで村山総理が辞意を表明されたのですが、どういう話だったのでしょうか。

○河野 村山総理は、こういう選挙結果になって自分は辞めたいので、あのときは明確に、後は河野さんにやってもらいたいと言ったんです。

僕は、まあそう言わずにもう少しやってくさいと言ったけれども、村山さんは、いや、もうできないから後は頼むよと繰り返し言っただけです。

それならば分かりました、引き受けましょうと言つたら、武村さんが、さきがけは村山を担ぐことで一致してきているので、自民党を担ぐことについては合意できていないから改めて相談してみる、ここですぐに了承はできないと言つた。

それじゃ、それぞれ持ち帰って、相談してまた集まろうと僕が言つたら、五十嵐官房長官が、それは駄目だ。この部屋の外はマスクミがいつばいで、一遍持ち帰りだと言つた途端に、村山内閣おしまいと大見出しで書かれるから、ここを出るときには決めて出てもらわないと、決めずに出てもらっては困りますと。

隣の部屋に森さんが控えていて、村山総理が辞めると言っているけど、引き受けるかどうかと言つたら、いや、それは引き受けない方がいい、ここは村山統投がいいと森さんは言うので、じゃ、そうしよう。僕もそんなに、何が何でもやりたいという思いじゃなかったから、幹事長がそう言うならそうしようと言つて、すぐその場で折り返したんです。

森君は、そこで小淵副総裁と相談していたんだろうし、小淵さんは、恐らく竹下派と相談していたと思う。

その伏線は、選挙中の最後の頃に秋田に行つたとき、野呂田芳成さんが、今日は一日お供しますと言つて一緒に車に乗っていたら、途中で橋本君を幹事長にしたらどうでしょうかと言うから、それは小淵さんが副総裁になつているから、一つの派閥から副総裁と幹事長と二人出るのは幾ら何でも駄目だ、橋本君を幹事長にするなら、小淵さんを外したらどうだ、私はどっちでもいいけど、どつちか一人と言つたんです。それがとても気に入らなかつたらしくて、経世会は河野を担がない、倒して自分たちで取る以外にないと決めたんだらうね。経世会は、かつて金丸副総裁、小沢幹事長という時期があつたじゃないか、なぜだめなんだということのようなんだよね。そんなことがあつて、参議院選挙が終わつた後に、村山から河野

へのボタンタッチはそこで止められたわけです。

○紅谷 その場面というのが、河野先生がご自身で回想され、自分が総理に一番近かった瞬間じゃなかったかというふうに述懐されていますが、やはりそう思われたときだったのでしょか。

○河野 ええ、そのときはそう読んでいましたね。

だけれども、隣の部屋へ行ったら、すぐ駄目だと言われたんで、その瞬間は一瞬だったな。

でも、おかげで八十まで生きたよね。あのとき総理になっていたらもう死んでいるよ。だから、人間万事塞翁が馬ですよ。

○紅谷 本当に、平成七年という年は、政治的にも大変な年でしたし、奥様を亡くされた年でもありました。

○河野 本当にいろいろな意味で、体力、気力とも無くして、私はならず、橋本君が総理になったものだから、気の毒なことに橋本君が先に死んじゃったんだ。かわいそうに。でも、なったから嬉しかったかもしれないけれども。

○紅谷 その後、八月には村山改造内閣が発足し、九月には自民党の総裁選挙を控えていました。

自民党は参議院選挙で議席を増やし、河野先生は総裁選挙に出ることになります、そこで対抗馬として橋本さんが出てきました。

○河野 これは私ごとになるんですけども、七月二十三日が参議院選挙投票日で、女房が選挙の最中の七月十三日に死んだんです。それから、選挙が始まる前に、僕自身の毎月受けている病院の検査数値が物すごく悪くて、病院に入ってくださいと言われた体調、女房が死んだという状況、それから選挙がうまくいかなかったということがあって非常に厭戦気分、もう政治闘争をしようという気分には余りならず、相当な精神的ダメージは受けていたんです。

そうして、総裁選になるといふときに、橋本君が出ると言い出したんです。僕は橋本君と悪い仲ではなかったから、二人で会ってよ

く話をしたんですよ。龍ちゃん、俺ら二人が喧嘩すると党は大変だよ、俺らの次の世代は、加藤君とか小泉さん、山崎さんだけど、まだとても任せられるほどじゃない。それが分かっている俺とあなたが喧嘩したんじゃ党も上手にやれないから、やらせてくれるなら俺はやりたい、どうなんだと言ったら、いや、俺も本当は出たいとは思っていないけど出ざるを得ないんだ。絶対後ろに下がれないから、悪いけれども戦わざるを得ないと言うから、そうか、それじゃ分かったと。

これで喧嘩するならもうできないと、そのとき僕は何となく思っただけです。

それから一か月ぐらいの間は、橋本派が旗揚げをしたとか何をしたらとか言っているのを聞きながら、僕は外務大臣だったから、ずっと海外ばかりで総裁として党内をまとめる仕事なんかできないんだ。僕の周辺の人たちからは、外務大臣を辞めて総裁選の準備をしないとこのままじゃ選挙にならないから、辞表を出してくれと言われましたよ。だけど、国の外交を預かっている以上、自分の都合を理由に辞めるというわけにはいかないと言っていたんです。彼らは、それじゃ本当にやられ放題だと言うので、僕は二年間総裁をやった間に村山政権をつくって、自民党の政権復帰を果たし、それから政治改革にも決着をつけた。その評価が駄目で替えた方がいい、あるいは、もっといい候補者がいると言うなら、もう止めた方がいいと考えたんです。

僕が、もつとテンションが上がっていい好戦的な心境になっていれば、もちろんやっただと思えますけど、さっき話したような前段があつて、個人的にも非常にテンションが下がっているときだったというところもありましたね。

さらに公的なことを言えば、初めての小選挙区制の選挙があるの、これは政対政の選挙になるわけだから、党内が対立してい

たら選挙にならないわけです。二つに分かれての論争、それはタカとハトの戦争です。例えば、龍ちゃんたちは改憲と言うし、こっちは護憲と言うし、相当本質的な意見の対立で戦うわけです。

それで勝ち負けがついて、一方は勝った方の軍門に下って一本になるんだけど、選挙の一月前に論争したんじゃない、その後どうにもならないだろうという気持ちもあって、評価されずに対立候補が出て、しかも、マスコミは粗方が橋本の方が勝つと見ている、党内の評価が向こうの方が高いというなら、これは戦わない方がいいなと。もちろんそれは相当な心の葛藤はあったけれども、最後に、オーストラリアで日豪定期閣僚会議が終わった晩にホテルで一人で考えて、これは止めようと思って、オーストラリアから宮沢さんに電話をかけて、こういうことで僕は止めようと思えますと。宮沢さんは、あなたがそうお考えならそれがいいでしょうと言うし、後藤田さんとは相談しようと思ったけどできなくて、それで東京に帰ってきて、僕の準備を一生懸命やってくれていた人達に集まってもらって、次は止めようと思うと言ったんです。

○紅谷 河野総裁を推していたのは大勇会のメンバーだけではなく、宏池会でも田沢吉郎さんや柳沢伯夫さんが推していたように、河野総裁に大きな問題がなければ、宏池会も、それから、幹事長が三塚さんですから、清和会だって総裁を推すのが当然だと思うのですが、宏池会なり清和会はどうだったのでしょうか。

○河野 そこはいろいろあって、三塚さんを幹事長にしたことに問題があったんですよ。

僕が官房長官を辞めて、これで野に下ってしばらく蟄居しようと言っているときに、何が何でも出ると言って僕を引きずり出した四人がむちやくちや走ってくれた。僕を担いでくれた人が三塚さんに、河野さんを応援してくれたら幹事長にすると口約束をしていたんだと思うんです。それは口約束だから証拠は何もないんだけど。

どこかでこの口約束は果たしておかないと、嘘をついたことになると思われるのが嫌で、そのためには森君を幹事長から外さなきゃいけないわけです。そこで、村山さんに談判して改造をやるうとだけでも、村山さんは改造は嫌なんです。そこは僕が駄目だったんだけど、村山さんに無理やり改造してもらって、野中さんと亀井さんを外したんです。

それで、三塚幹事長は実現したけれども、野中、亀井という腕っ節の強そうなのがみんな反河野に回った。そういう下地があって、総裁選はもう出ないということになったわけです。

○紅谷 河野先生が総裁選出馬を断念される一方、総裁選が橋本さん一人だけではというので、清和会から小泉純一郎さんが手を挙げました。

○河野 清和会というところは不思議なんだよね。

何だか知らないけれども、総裁選はお祭りだから、わいわいやった方がいいと言ってます。

清和会では、小泉なら先々邪魔にならないみたいない気分です。それが、橋本君がちよっとびっくりするぐらい小泉が票を取るんです。それが後々、小泉総理に繋がるのだから、分らないものだよ。

○紅谷 河野先生は総裁選を断念されましたが、村山内閣で引き続き外相として残られます。

○河野 僕は辞表を出したけれども、村山さんから、それはこれだから、外務大臣は続投してくれと言われて残ったんです。

だから、あそこで僕が絶対辞めると言えば、橋本君は外務大臣志向だったから、橋本外務大臣だったかもしれないね。僕が辞めなかったのは、気になっていた沖縄少女暴行事件があつて、モンデー駐日大使と話をして、この問題はちよっと大変だから、これはやら

なきやいけないかなと思っただからです。

○紅谷 総裁選挙が終わって、橋本総裁誕生が平成七年九月です。それから三か月後の平成八年一月に、村山総理は突然辞意を表明されました。

ですから、常会の前に首班指名をするために、急遽臨時会を召集して総理指名を行い、橋本総理が誕生します。政権の枠組みは次の選挙まで続きますが、河野先生が辞め、村山総理が辞められたので、自社さ政権は実質もう終わったというのが正直な感想でした。

○河野 それにしても、村山という人は立派な人だったね。それは日本の国にとつてすごく運が良かったんじゃないかな。とても正直でまともな人が、戦後五十年という節目のときに総理大臣になっていて村山談話を出して、あれは日本の国にとつては良かったことだと思えますね。

自民党総理は随分いたけれども、やはり大平とか宮沢という人は立派だと思いましたが、村山さんは見識もあり、それに次ぐ人だと僕は思いますね。

もう今は九十七、八ぐらいの高齢だけのお元気なようで、一遍会いたいと思っっているんだけどね。

《小選挙区比例代表並立制で初の総選挙》

○紅谷 平成六年一月に細川・河野トップ会談があり、政治改革関連法が成立しましたが、新たな選挙区の区割りについては、選挙区画定審議会の答申を待って十一月に法案が成立し決定しました。

小選挙区制での初めての選挙は平成八年十月でしたから、小選挙区制法案が通ってから二年以上が経過していました。

河野先生の選挙区は、旧神奈川県五区の平塚、小田原、内陸部の秦野、伊勢原、厚木までの非常に広い選挙区でしたけれども、ここが

神奈川県十五、十六、十七の選挙区に分かれました。自民党は河野先生と亀井先生が現職で、内陸部の十六区は亀井先生の地盤でしたが、河野先生は、住んでいた平塚の十五区なのか、出身地小田原の十七区なのかで、随分迷われたのではないのでしょうか。

○河野 それはもう本当に迷ったんです。私の家、河野家は昔から小田原なんです。私の父が選挙に出るときは、小田原には鈴木英雄さんという政友会の大物議員がいて、小田原からはとても出られないというので、平塚に自宅を移すんですよ。

それが、戦争になって平塚は空襲で危ないので小田原へ戻ったんです。だから、僕は小学校、中学校は小田原なんです。

父が死んで後を継ぐということで平塚を拠点としていたけど、小学校、中学校の同級生はみんな小田原にいて、平塚には幼馴染みがないんです。それでも父の支持者が多かったから、小選挙区になるまでに選挙を九回やっています。後援会は若い者も増えてきて、老壮青、みんな平塚を中心でした。

そこで、十五区の平塚でやるか十七区の小田原でやるか、本当に悩んだけど、僕もそう先は長くないし、やはり実家と菩提寺もある小田原にと、さんざん悩んで決めたわけです。だから平塚の後援者からは俺らが育ててやったんじゃないかと怒られました。その上、僕の後を県会議員にやらせようとしていたら、急に太郎が出るというのでびっくりして。全然そんな話はなかったんだけど、太郎は平塚で生まれて育ったから、前からおやじがいなくなったら、小学校、中学校の仲間とここでやるんだと言って、彼は頑張っていたらしいんです。

小田原では、小学校、中学校の同級生がいてやはりありがたいもので、今でも小学校からの付き合いの仲間がいて頼りになるんですけど、悩んだのは、僕は平塚で九回選挙をやったといっ